

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第270集

行田市

馬場裏遺跡Ⅱ

県立行田進修館高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告

— Ⅱ —

2001

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

少子高齢化をはじめとする近年のさまざまな社会の変動に対応するため、埼玉県では、「環境優先・生活重視」の基本理念のもと、新世紀の埼玉の92(くに)づくりをになう若い世代の育成にも力を注いでいます。その柱となる学校教育では、生徒の自主性を尊重し、一人一人の多様な個性を生かす学校運営の充実をめざしています。

その一環が、単位制により多数の選択科目群のなかから生徒が主体的に選択し、学習を行う総合学科の新設です。この施策に基づき、伝統ある忍藩学を受けつぐ県立行田進修館高等学校にも、多彩な選択授業を行うための新たな校舎が建設されることとなりました。

一方、県立行田進修館高等学校とその周辺には、行田市域でも数少ない縄文時代の遺跡として知られる馬場裏遺跡が所在しております。これまでも数次にわたって発掘調査が実施されており、縄文時代から中世に至る大規模な集落跡が広がっていることが明らかになってきました。

この事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることになりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県教育局管理部財務課の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

今回の馬場裏遺跡第23次調査では、縄文時代や平安時代の住居跡、中世の井戸、近世の溝など、多くの貴重な埋蔵文化財が発見されました。とくに、縄文時代前期末の遺構につきましては、馬場裏遺跡はもとより、県内でも調査例は少なく、貴重な例を加えることができました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護の基礎資料として、また学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御指導・御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、同管理部財務課、県立行田進修館高等学校をはじめ、行田市教育委員会ならびに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年 3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野 健 一

例言

1. 本書は、埼玉県行田市に所在する馬場裏遺跡の発掘調査報告書である。
馬場裏遺跡については、以前の遺跡名であった長野中学校校内遺跡を含め、行田市教育委員会や当事業団よりすでにいくつかの報告が刊行されている(斉藤1980、中島1990・1993・1994、大谷1999ほか)。
本書は第23次調査についての報告である。
2. 遺跡の略号と、第23次調査時の代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
馬場裏遺跡(BBUR)
埼玉県行田市長野1320番地他
平成10年8月20日付け教文第2-84号
3. 発掘調査は、県立行田進修館高等学校総合学科棟の建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県教育局管理部財務課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。
本事業のうち、発掘調査については磯崎一、石坂俊郎が担当し、平成10年9月1日から平成10年10月31日まで実施した。
整理報告書作成作業は黒坂禎二が担当し、平成12年12月1日から平成13年3月23日まで実施した。
5. 発掘調査時における遺跡の基準点測量は、アスコエンジニアリング株式会社に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は、磯崎、石坂が行った。
整理報告書作成作業時の遺物写真撮影は、黒坂が行った。
7. 出土品の整理及び図版の作成は黒坂が行った。
報告書本文の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、その他を黒坂が行った。
8. 本書の編集は、黒坂があたった。
9. 本書にかかる資料は、平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

凡例

1. 遺跡全体図における X・Y の数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。
また、各挿図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。
2. 馬場裏遺跡第23次調査におけるグリッドは、座標値 X=16.570、Y=-32.730 を原点とし、10m×10m で設定した。呼称は、方眼の北西隅の杭名称を用い、南方向数値、東方向アルファベットで指数が増加する方法をとった。
これは、第22次調査(大谷1999)と共通している。
3. 測量、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構 住居跡・土壇・井戸跡・溝…1/60
ピット…1/80
遺物 縄文時代 土器…1/3(拓影図)
1/5(実測図)
石器…1/2・1/3
平安時代 須恵器・土師器…1/4
石器…1/3
その他、遺跡位置図、周辺地形図、調査区全体図等は、その都度、縮尺率を示した。
4. 縄文土器実測図・拓影図の断面中におけるドット指示は以下のとおりである。
●…胎土に繊維を含む
○…胎土に繊維を微量含む
5. 遺構測量図、遺物実測図中の網部指示は以下のとおりである。
左下がり斜線…土壌による地山
均等な砂目……炉跡、焼土
不均等な砂目…攪乱
6. 遺構測量図中の土層番号は、ローマ数字が遺跡全体に通じる基本土層、算用数字が遺構個別の観察結果をあらわす。
7. 遺構測量図中の遺構略称は以下のとおりである。
S J…竪穴住居跡
S K…土壇
S E…井戸跡
S D…溝
P……柱穴類
8. 本文中の度量衡は以下の基準で統一してある。
標高・遺構計測値…m 単位
遺物計測値………cm/g 単位
9. 遺物観察表中の色彩表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』1998年版に準拠した。また、法量の() 付き数値は推定値を、残存率は各部位に対する数値を表す。
10. 遺物観察表中の胎土および焼成は以下のとおり略した。
胎土 A…赤色粒 B…石英
C…長石 D…角閃石
E…白色粒 F…白色針状物質
G…礫 H…砂粒
I…黒色粒
焼成 1…良好 2…普通
3…不良
11. 文中の引用文献は、(著者 発行年) の順で表現し、参考文献とともに巻末でその一覧を掲載した。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査の概要	1
1. 発掘調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書作成	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	7
IV 遺構と遺物	11
1. 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 土壇	19
(2) ピット	21
(4) 遺構外	23
2. 平安時代以降の遺構と遺物	26
(1) 竪穴住居跡	26
(2) 井戸跡	28
(2) 溝	28
(4) ピット	29
V まとめ	31
引用参考文献	32
抄録	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第11図 第8号住居跡出土土器	18
第2図 馬場裏遺跡の位置と周辺遺跡	5	第12図 縄文時代の土壇	20
第3図 馬場裏遺跡の各調査区	8	第13図 縄文時代のピット	22
第4図 馬場裏遺跡第23次調査全体図	10	第14図 遺構外出土土器(1)	24
第5図 第3号・第4号住居跡	12	第15図 遺構外出土土器(2)・石器	25
第6図 第5号住居跡	13	第16図 第1号住居跡	27
第7図 第5号住居跡出土土器	14	第17図 第2号住居跡	28
第8図 第6号住居跡	15	第18図 第1号井戸跡・第1号溝	29
第9図 第7号住居跡	16	第19図 中近世のピット	30
第10図 第8号住居跡	17		

表 目 次

第1表 第1号住居跡出土遺物觀察表 ……………	26	第2表 第2号住居跡出土遺物觀察表 ……………	28
-------------------------	----	-------------------------	----

図 版 目 次

図版1 馬場裏遺跡第23次調査区全景	図版9 第1号井戸跡
図版2 調査区東縄文遺構群	第2号土壙・第1号溝
調査区西平安～近世遺構群	図版10 第1号・第2号住居跡出土土器・石器
図版3 第1号住居跡新期	第4号・第6号・第7号住居跡出土土器・石
第1号住居跡古期	器
図版4 第1号住居跡新旧床面	図版11 第5号住居跡出土土器（1）
第1号住居跡旧カマド	第5号住居跡出土土器（2）
図版5 第2号住居跡	図版12 第5号住居跡出土土器（3）
第3号・第4号住居跡	第8号住居跡出土土器（1）
図版6 第4号住居跡	図版13 第8号住居跡出土土器（2）
第5号住居跡	土壙・ピット・井戸跡出土土器
図版7 第5号住居跡遺物出土状況	図版14 遺構外出土土器（1）
第6号住居跡	遺構外出土土器（2）・石器
図版8 第7号住居跡	
第8号住居跡	

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

阪神淡路大震災の教訓を生かすために、まち・安全彩の国構想の一環として、災害時に高齢者や障害者が優先的に避難できるよう、県立高等学校を利用した防災拠点の整備を積極的に進めている。

未来の埼玉を担う人材の育成については、生涯学習の環境を整備するとともに、先見性や創造力をはぐくむよう、さまざまな学校教育の改革や試行をすすめている。県立行田進修館高等学校に計画された総合学科の新設もその一つである。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県立行田進修館高等学校総合学科棟の建設に関しては、平成9年12月5日付け教財第624号で、県教育局管理部財務課長より事業予定地内における埋蔵文化財

の所在及び取扱いについて、照会を受けた。文化財保護課では、平成10年1月7日付け教文第1290-1号で、予定地には馬場裏遺跡(68-029)が所在し、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。

文化財保護課と関係部局との事前協議がなされてきたが、計画の変更が不可能であるため、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。

発掘調査については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団・県財務課・文化財保護課の三者により、調査方法・期間・経費等についての協議が行われた。調査は平成10年9月1日から10月31日まで実施された。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである。

平成10年8月20日付け 教文第2-84号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

[平成10年9月上旬]

8月中の事前準備を経て、事務所建設、機材を搬送するとともに、重機による表土掘削を開始する。また、表土の掘削が完了した個所より、補助員による遺構確認作業にはいる。しかし、旧建物の基礎をはじめとする攪乱が非常に多く、作業は困難を極めた。

[平成10年9月中旬]

重機による表土掘削完了後、比較的良好な状態で遺存していた西側の一部の遺構を精査しはじめる。また、東側の攪乱の一部は比較的浅く、下位で遺構を発見できる可能性が判明したため、その深さを見極めつつ、攪乱土の取りはずしを行う。

[平成10年9月下旬・10月上旬]

引きつづき、遺構の精査を行う。調査の工程は、攪乱土の処理の関係から西側を先行して行った。

[平成10年10月中旬]

遺構の掘り下げを継続するとともに、完了した西側部分より平面測量を開始する。

[平成10年10月下旬]

全ての遺構を完掘・測量するとともに、調査区全体を清掃し、全景写真を撮影する。さらに、不審個所の駄目押し調査をした後、調査区内の危険個所を養生するとともに、器材を搬送、事務所を撤収し、全ての調査を完了する。

(2) 整理・報告書作成

[平成12年12月]

上旬、遺物および図面・写真類を整理室に搬入し、遺物の水洗・注記を開始する。これと並行して、現場撮影分の写真を整理、そして、遺構測量図面の整理をあわせて行う。

中旬、上旬からの作業を継続するとともに、注記が完了した縄文土器より接合・復元を開始する。また、遺構測量図面の修正作業や遺構写真図版の割付もあわせて行う。

下旬、土器の接合・復元を完了し、報告書掲載遺物の抽出を経たのち、石器とあわせ、実測図作成や拓本採取作業に取りかかる。

[平成13年1月]

上旬、前記の作業を継続し、それらを終了する。さらに、遺構測量図や遺物実測図のトレース作業を開始する。また、並行して報告書本文説明原稿を執筆し始める。

中旬、挿図版下の整備を行うとともに、報告書の割付作業や写真撮影作業を行う。

下旬、写真を含めた版下作成作業・原稿執筆作業を完了し、入稿する。

[平成13年2月・平成13年3月]

3回の校正を経て、3月下旬、報告書を印刷、刊行に至る。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10年度）

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

庶務課長 金子 隆
主査 田中 祐二
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

調査部

調査部長 谷井 彪
調査部副部長 水村 孝行
調査第一課長 井上 尚明
統括調査員 磯崎 一
主任調査員 石坂 俊郎

(2) 整理事業（平成12年度）

理事長 中野 健一
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長 関野 栄一
主席(庶務担当) 阿部 正浩
主席(施設担当) 野中 廣幸
主任 菊池 久
主席(経理担当) 江田 和美
主任 長滝 美智子
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 高橋 一夫
資料副部長 鈴木 敏昭
主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一
主任調査員 黒坂 禎二

II 遺跡の立地と環境

馬場裏遺跡は埼玉県行田市長野に所在し、その南に秩父鉄道東行田駅を取りこむように展開している。遺跡は南北約800m、東西約400mにもおよぶ広大な範囲が認定されており、今回の調査地点はその北西、東行田駅からは約500m付近に位置している。

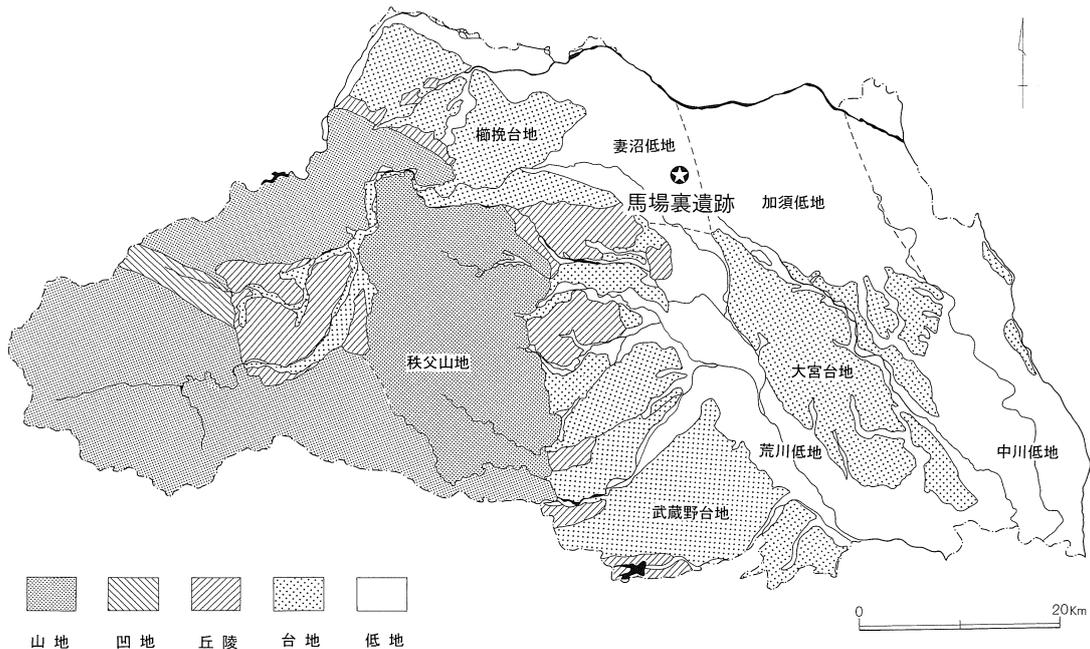
埼玉県の北東にある行田市は、利根川が形成した妻沼低地に含まれるとともに、熊谷市三ヶ尻付近を扇頂とする荒川の低位扇状地の東方扇端部にもあたる。この低地はさらに東の加須低地へと連なり、遺跡のあたりは標高16~20mの平坦な沖積平野が広がる。

だが、加須低地は関東造盆地運動により地盤が沈降したことが明らかとなっており、本遺跡から南東も、大宮台地へとつづくローム台地が沖積地の下に隠されている。この埋没低台地は、本遺跡の周辺を北端として、酒巻導水路(玉野用水)や忍川、さらに元荒川の東側をたどりつつ、鴻巣市安養寺地区にかけての約10kmにわたり弧を描くようにのびている。

この低台地上には、埼玉古墳群をはじめ、さまざまな時代の遺跡が数多く分布している。本遺跡の周辺も密度は高く、北に柳坪遺跡(中島1993)、南には林遺跡や中斉遺跡、長野神明遺跡(塩野1970)などが埋没台地に沿って連なっている。その歴史は途絶えることなく、中近世期に至っては、沖積平野を縦横に行きかう水流と低台地をたくみに利用した忍城が南西に整備され、武蔵北西部の有力都市として成長した。当遺跡の東側では日光警護の八王子千人同心が往来した日光脇往還が南北に走り、沿道に久伊豆神社と長久寺が所在している。両寺社は、文明年間に成田下総守顕泰が忍城を築城した際、遷座・創建されたと伝えられている。

時遡り、周辺の旧石器時代遺跡は調査例が少なく、新屋敷遺跡(西井1996)や中三谷遺跡(西井1989)などでナイフ形石器を主とする石器群が発見され、後に馬場裏遺跡に包括される長野中学校校内遺跡から削器・細石核が採集されている(栗原1963)にすぎない。

第1図 埼玉県の地形 (1/1,000,000)



第2図 馬場裏遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)



- 1 馬場裏遺跡 2 林遺跡 3 中斉遺跡 4 長野神明遺跡 5 柳坪遺跡 6 白鳥田遺跡 7 池守遺跡 8 皿尾遺跡
 9 池上遺跡 10 小敷田遺跡 11 東沢遺跡 12 持田藤の宮遺跡 13 野合遺跡 14 高畑遺跡 15 武良内遺 16 鴻池遺跡
 17 西谷遺跡 18 渡柳陣場遺跡 19 原遺跡 20 原東遺跡 21 内郷遺跡 22 船原・内郷遺跡 23 百塚通遺跡 24 旧盛徳寺跡
 25 小針北遺跡 26 小針遺跡 27 稻荷通遺跡 28 袋・台遺跡 29 忍城跡 30 忍三郎館跡
 a 埼玉古墳群 b 白山古墳群 c 若王子古墳群 d 佐岡古墳群 e 若小玉古墳群 f 小見古墳群 g 新郷古墳群
 h 大稻荷古墳群 i 斉条古墳群 j 犬塚古墳群 k 酒巻古墳群 l 中条古墳群 m 下忍愛宕神社古墳 n 下忍宝養寺古墳

沈降が災いしてか、縄文時代遺跡の調査例もさほど多くはない。本遺跡で前期から後期の遺構が発見されているのははじめ、瓦塚古墳西側隣接地(中島1988)、原遺跡(栗原1978)、船原・内郷通遺跡(中島1991)、下埼玉通遺跡(中島1988)、築道下遺跡(吉田1997)などに調査が及んでいるが、中期から後期が多い。このような中、馬場裏遺跡は、調査回数のみならず、前期から後期に至る時代幅、その分布範囲と豊富な遺物量に関しても近隣最大の縄文遺跡として知られている。

縄文末の空白期を経て、弥生時代に至ると、埋没台地のみならず、荒川扇状地の扇端部周辺の沖積地にも遺跡が進出する。なかでも中期前半須和田期の環濠集落と方形周溝墓が調査された池上遺跡(中島1984a)と小敷田遺跡(吉田1991)が著名である。そして、さらに西方の北島遺跡では、竪穴住居跡50軒をこえる中期後半の集落跡のみならず、水田跡、分水嶺をまたぐ大水路跡、築堤跡などが発見された(註1)。

北島弥生集落は、上層を古墳時代から古代に至る洪水層で封鎖されており、しかも、にわかには識別しがたい土壌のなかに遺構が構築されていた。この例から、これまでわずかに袋・台遺跡(高橋1982)や船原・内郷通遺跡などで住居跡が検出されたにすぎない周辺の弥生遺跡も、今後発見例が増すと考えられる。

しかし、古墳時代の遺跡増加は、弥生の新例を予想してもあまりある歩調で進む。周辺では高畑、武良内、鴻池遺跡(田部井1977)、陣場遺跡(栗原・駒宮1990)、長野神明遺跡、柳坪遺跡、白鳥田遺跡(木戸1985)、小敷田遺跡、小針遺跡(齊藤1980b)、築道下遺跡(栗岡1998)、袋・台遺跡、馬場裏遺跡、池守遺跡(齊藤1981)などで集落跡や方形周溝墓などが調査されている。こうした急膨張は、新たな灌漑技術の導入や木製農具、鉄製農具の普及により、広大な低地の開発が飛躍的に進行したことをものがたっており、埼玉古墳群成立の経済基盤が確立したことをうかがわせる。

翻り、これら集落が支えた古墳は、埼玉古墳群内で5世紀後半の稲荷山古墳を契機に、二子山古墳、鉄砲山古墳、将軍山古墳など、100m超級の前方後円墳や

大型円墳の丸墓山古墳が継続的に築造される。この他白山、若王子、佐間、若小玉、小見、新郷、大稲荷、斎条、酒巻、中条などの各古墳群が6世紀前半から7世紀前半を中心に形成されている。

奈良・平安時代の遺跡は、池上遺跡、小敷田遺跡、柳坪遺跡、北大竹遺跡、原遺跡(齊藤1984)、愛宕通遺跡(瀧瀬1985)、下埼玉通遺跡(塚田1988)、馬場裏遺跡、白鳥田遺跡、野合遺跡(齊藤1979)、八ツ島遺跡(山本1998)などが調査されている。このうち小敷田遺跡からは藤原宮期の出挙を記した木簡が出土しており、郡衙またはそれに付属する施設との関連性が指摘されている。また、元荒川に沿った築道下遺跡では7世紀後半以降、大規模な掘立柱建物群が継続的に営まれており、水上交通の要衝に位置する埼玉郡内の中核的な集落の一つと考えられている(山本2000)。

この他に寺院跡として旧盛徳寺跡(栗原1975)がある。寺伝では大同年間の創建とされ、8世紀末の重廓文軒平瓦や、9世紀後半の単弁4葉軒丸瓦などが出土し、境内には円形の柱座を造りだす礎石が現存している。また、旧盛徳寺跡の北方の水田から「矢作私印」と印された大和古印が出土している。

平安時代末から中世になると、武蔵七党や在地武士団の館跡が多数知られているが、調査例が少なく、実態はよくわからない。行田市付近には久下、忍氏、河原、長野、行田、麻績、渡柳、広田、野、津之戸、笠原、真名板、多賀谷などの数多くの氏が割拠していたことが知られ、現在もその本貫地と考えられる地名や館の伝承などが残されている。

中世の遺跡では、築道下遺跡から13世紀から14世紀にかけての区画溝を設ける墓跡群が検出され、板石塔婆22基、蔵骨器6個、埋納焼骨23基などが出土している(剣持1998)。また、長野神明遺跡では二重の堀を構える館跡が発見され、外堀から500枚を超える多量の柿経が出土している(行田市教育委員会1995)。

(註1) 平成10~12年度当事業団調査、現在整理中。

Ⅲ 遺跡の概要

馬場裏遺跡は、これまでに行田市教育委員会を中心とした計22次にわたる発掘調査が実施され、旧石器時代から中・近世に至る数多くの遺構や遺物が発見され、大きな調査成果が挙げられている。遺跡の範囲は広大であるものの、調査は各所で行われ、校舎建設や下水道工事を原因とするなど、比較的広範囲の様相が把握しやすい環境にある。ここではまず、馬場裏遺跡調査の経緯に詳しい行田市教育委員会の第18次調査報告(中島1994)および前回報告(大谷1999)をたよりに既往調査の概要を紹介する。

なお、馬場裏遺跡の北部は、1980年代まで「長野中学校校内遺跡」と呼称されていた。だが、調査の進行とともに両者が分別しがたい同一の遺跡であることが判明し、その範囲が統合されている。

馬場裏遺跡は、第二次世界大戦中に行われた長野中学校の建設工事の際に偶然発見された。それ以後、校庭から縄文土器や石器が採集されることが知られるようになり、昭和38年には栗原文蔵が採集品のうち、黒曜石製細石核、珪岩製削器等の旧石器や縄文土器、石器等を紹介している(栗原1963)。

本格的な発掘調査の端緒は昭和54年のことで、長野中学校の校舎増築にともない行田市教育委員会が最初の発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期の住居跡1軒と古墳時代から平安時代にわたる9軒の住居跡などが検出された(斉藤1980a)。また、昭和59年には中島宏により長野中学校校庭で採集された縄文土器が報告され、当時、県北部から上毛に数少ない縄文時代前期の代表的な遺跡として注目されるようになった(中島1984)。さらに、昭和60年には長野中学校の貯水槽設置にともない第2次の調査が実施され、土壇2基と須恵器が発見された。

この頃まで、「長野中学校校内遺跡」は同中学校と周辺の比較的狭い範囲と考えられていた。だが、昭和63年度以降、下水道工事や個人住宅建設にともない行田市教育委員会が継続的に発掘調査を実施した結果、

それまで別個の遺跡と考えられていた馬場裏遺跡と長野中学校校内遺跡の内容と範囲が、分かちがたいことが明らかとなり、以後、馬場裏遺跡に遺跡名が統一され、調査が継続されている。

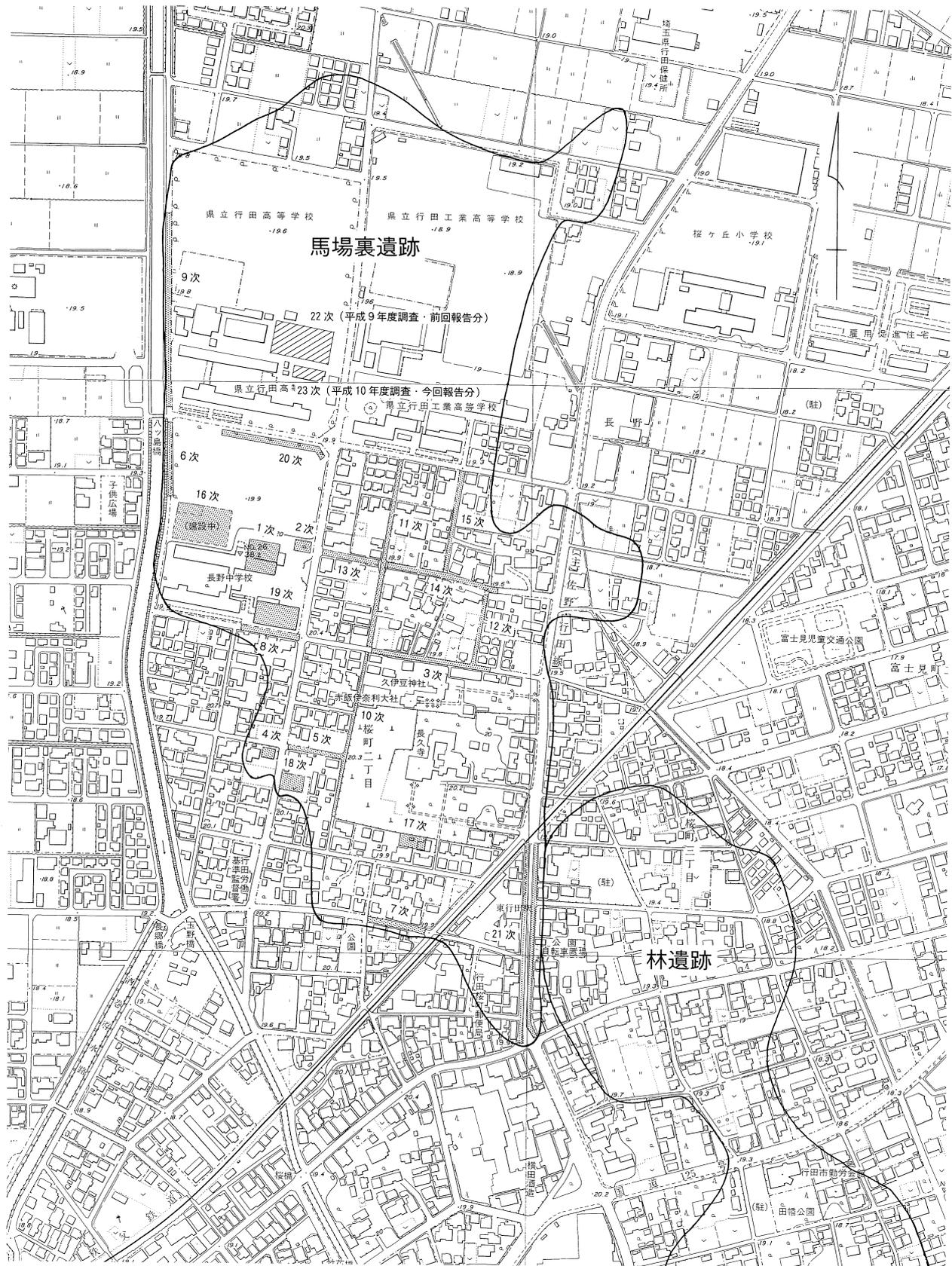
調査が本格化した昭和63年度には、下水道敷設工事にとともなう第3・5～7次調査、および個人住宅建設に先立つ第4次調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡(第3～5・7次調査)、大溝(第5次調査)、近世の溝(第6次調査)などが検出された。このうち、第4次調査では奈良・平安時代の住居跡2軒、土壇1基、溝2条が調査され、住居跡から9世紀後半の一括資料が出土している(中島1990)。

平成元年度には下水道の敷設にとともなう第8～13次調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡(第10～13次調査)、近世の溝(第9次調査)などが発見された。また、平成2年度には下水道敷設工事にとともなう第14・15次調査と長野中学校の体育館建設に先立つ第16次調査が行われ、平安時代から中世の溝・土壇(第14～16次調査)、旧石器時代の剥片、縄文土器(第16次調査)などが検出された。そして、平成3年度には長久寺の南側に隣接する第17次調査区で同寺に関わりをもつと想定される土壇群が発見され、本遺跡における中・近世期の一端が明らかにされた(中島1993)。

さらに、平成4年度には個人住宅の建設にとともなう第18次調査と長野中学校のプール建設のための第19次調査が実施された。第18次調査では古墳時代末から奈良時代にわたる住居跡4軒、溝3条、土壇13基、ピット49基が検出され、大溝では6世紀末から7世紀前半にあたる黒色処理された土師器がまとまって出土し、注目された(中島1994)。これに対し、第19次調査では古墳時代後半から平安時代の住居跡16軒・土壇3基、時期不明の溝2条・土壇4基などが調査され、土師器、須恵器、耳環、埴輪、土錘、編物石など、多彩な遺物が出土している。

平成5年度には長野中学校の校庭整備にとともなう第

第3図 馬場裏遺跡の各調査区 (1/5,000)



発掘主体者 行田市教育委員会



埼玉県埋蔵文化財調査事業団



20次調査が実施され、市内では稀少な縄文時代前期の住居跡3軒・土壙1基、縄文時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡4軒・土壙1基、平安時代の住居跡1軒、時期不明の溝2条・土壙7基・ピット多数が検出されている。また、平成6年度には下水道敷設工事に際し第21次調査が実施され、平安時代の住居跡3軒、溝30条、土壙46基、ピット多数が発見された。この調査地点は東行田駅の南側にあたり、遺跡の南側への広がり確認され、隣接する林遺跡と本来は一連の遺跡である可能性が指摘されている。

平成9・10年には、行田進修館高等学校総合学科新設にともなう同校改修工事が着手され、前回報告の第22次、そして、今回報告の第23次調査の双方を当事業団が実施した。第22次調査は、同高等学校体育館を防災基地を兼ね備えたものにするために行った。発掘調査では、奈良・平安時代の住居跡5軒、中・近世の火葬跡2基、溝14条、井戸6基、土壙12基、ピット249基などを検出した。

同次調査では、遺構こそ検出されなかったが、縄文時代前期から後期にかけての縄文土器・石器が出土している。また、奈良・平安時代の遺物として土師質に焼成された瓦堂の屋蓋部の破片が溝から出土しており、仏教信仰の浸透と、瓦堂所持の背景となる馬場裏古代集落の規模と勢力が推測できる。また、火葬跡や井戸から出土した大型の板石塔婆や巴文軒丸瓦など、中世以降の当地を解明する上で貴重な資料を得ることができた(大谷1999)。

以上、これまでに行われた調査の成果から、馬場裏遺跡は、縄文時代前期から後期に至る過程で幾度となく人々が住まい、さらに古墳時代後期から奈良・平安時代にかけても、耳環や瓦堂を所持するほどの充実かつ大規模な集落が継続的に営まれていたことが明らかにされつつある。また、中世以降の様相は今もって不明な点が多いが、遺跡の南に残る長久寺や久伊豆神社と密接な関連をもちながら、人々の生活宗教の場として展開した様相を垣間見ることができる。

さて、今回報告の第23次調査では、縄文時代の住居

跡6軒、平安時代の住居跡2軒、縄文時代の土壙6基、中世の井戸跡1基、詳細不明の中近世溝1条と、縄文時代および中世のピット多数を調査した。また、周辺地形はほぼ平坦だが、東西に長い調査区の中央やや西寄りには埋没谷が見つかった。しかし、縄文時代の遺構がこの上に構築されており、沖積世でも早い時期にこの起伏は埋まりきっていたと考えられる。

全長40mにも満たない調査区で分布を決めつけるわけにはいかないが、限られた範囲内では、遺構の時期による片寄りが認められた。すなわち、縄文遺構は埋没谷を境とした東に分布しており、構築に際し、谷部が意識されていたことがわかる。これに対し、平安時代は、その両側に遺構が存在する。また、調査区西の中・近世のピットは、埋没谷を境に分布が途絶えており、谷の名残である微地形を意識したともとれる。これは、至近に位置する第22次調査区でも同様であり、唯一両調査区にまたがる第22次第8号溝＝第23次第1号溝も埋没谷に沿った方位性を示す。

調査対象地は攪乱著しく、無傷で自然堆積土が遺存していた個所はほとんどない。遺構が遺存する可能性が残されている個所は徹底的にこれを除去したため、確認面の高さはめまぐるしくかわり、北東部の縄文遺構は、本来の姿を推定できずに終わった。

6軒を認めた縄文時代の住居跡は、遺物の少なさや、遺構自体の曖昧さから、それぞれ時期判定に苦慮した。本報告では、炉跡より出土した土器より後期が2軒、竪穴の形態より中期が2軒、出土遺物と遺構形態より前期末葉が2軒と判断したが、全幅の確信を示せるわけではない。さらに、土壙6基は、覆土こそ縄文だが、遺物少なく細かい時期は確定できない。

これに対し、平安時代の住居跡は、1軒がカマド付近がかるうじて遺存した程度で、遺構形態を確実に把握できるのは1軒のみであった。後者は、竪穴を埋め戻して再度居住設備を整えており、建て替え前後の床面は0.25mもの落差があった。両者とも出土遺物は少なく、特殊遺物は出土していない。

第4図 馬場裏遺跡第23次調査全体図 (1/200)



IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡 (第5図)

D-6グリッドで検出したが西半は深い攪乱に破壊されつくし、精査できたのは東半と南の一部のみである。開口部形態は径3.00m前後のほぼ円形で、確認面から0.30m前後の深さが遺存していた。覆土は、炭化物やローム粒子を混じえる灰褐色土を基調として、下層ほど黄色味が増す。

床面では褐色土を覆土とする4本の小穴を発見した。これらは、竪穴北東の小穴群と平面的に連続して分布しており、本住居跡に伴わないととれる。だが、G断面線では新期小穴の重複は認められず、これらは少なくとも本住居跡より古いか、付属するものとして考えられる。いずれにせよ、4本とも掘り込みは浅く、柱穴として機能していたとは想定できない。

遺物は出土しなかったが、至近で発見した第6号住居跡と規模や形態が酷似しており、ほぼ同時期に構築された可能性が考えられる。

第4号住居跡 (第5図)

D-5グリッドの北方調査区壁にかかり後期土器を出土する炉跡を発見したため、周囲を精査し、住居跡としての把握に努めた。しかし、明確な規模形態や柱穴の取り合わせを確定できず、第5図では第3号住居跡周辺を含めた小穴群をすべて掲載した。

他遺跡例を参考に、取り敢えずおおよその組み合わせを想定してみれば、炉跡を中心に半径1.80m強の位置に弧状に連続する小穴群が有力だろう。だが、覆土の共通や掘削の深浅、出土遺物の時期などに通じるわけでもない。

炉跡は、地床炉だが、掘り込みが深い中期末から後期前葉に典型的のもので、明確な炉床はない。覆土は、上層灰褐色、下層鈍い赤褐色土が主体となり、下層ほどに焼土粒子が多く混じる。

遺物は、前に示した弧状小穴の範囲内で縄文土器が10点、チャートの破片が3点の計13点が出土した。土器は、前期から後期までが混在しているが、炉跡からは、後期の破片が5点まとまって出土している。第5図4・5がこのうちの2点で、4は沈線のみで区画文か格子・縦位線文を描出する深鉢片である。この他は周辺小穴や確認時に出土したもので、1・2はそれぞれ文様帯をもつ関山式土器である。また、3は器面の凹凸著しい前期末葉の無文土器である。

炉からの出土土器を主体として考えると、本住居跡は後期前葉に構築されたものと判断できる。

第5号住居跡 (第6・7図)

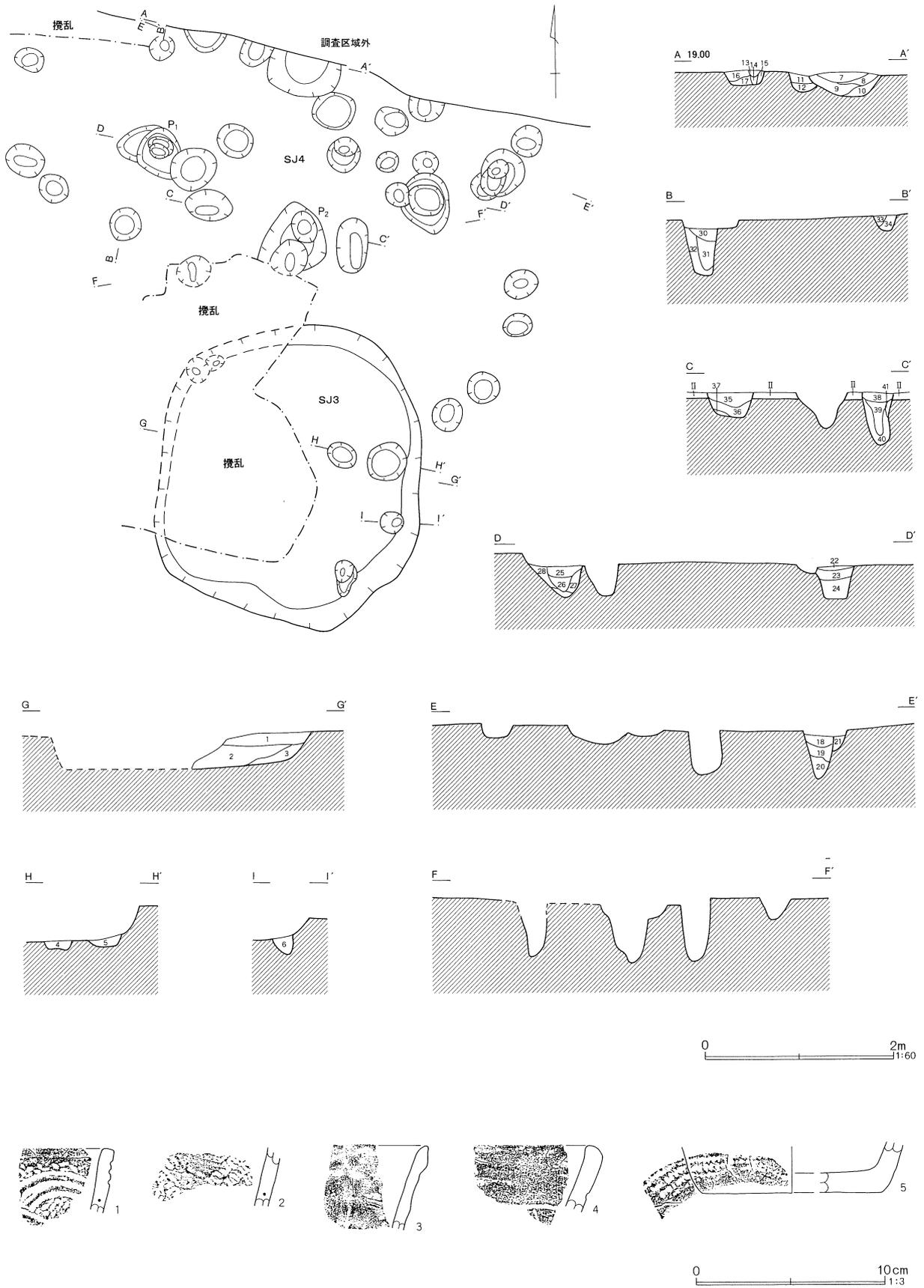
第2号住居跡の調査前後に、C-6グリッドで炉跡と、遺物が集中する土壌状の落ち込みを発見し、住居跡を前提に周囲を精査した。だが、第4号住居跡と同じく、報告時までには周囲との組み合わせを判断できず、第6図にそのままに掲載した。

周囲の小穴群も、攪乱や深い掘り込みの第8号住居跡に阻まれ、満足な範囲を精査できていない。また、炉跡を中心として複数が平面的に弧を描くなどの傾向もない。さらに、覆土の特徴や掘り込みの深浅、出土遺物からも特別な組み合わせを想定することができなかった。炉跡は、断面鍋底状の地床炉で、覆土は灰黄褐色土を主体とし、上層に焼土粒子が多い。

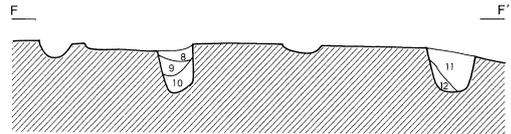
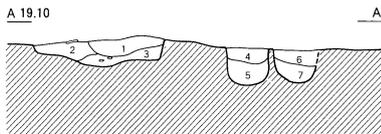
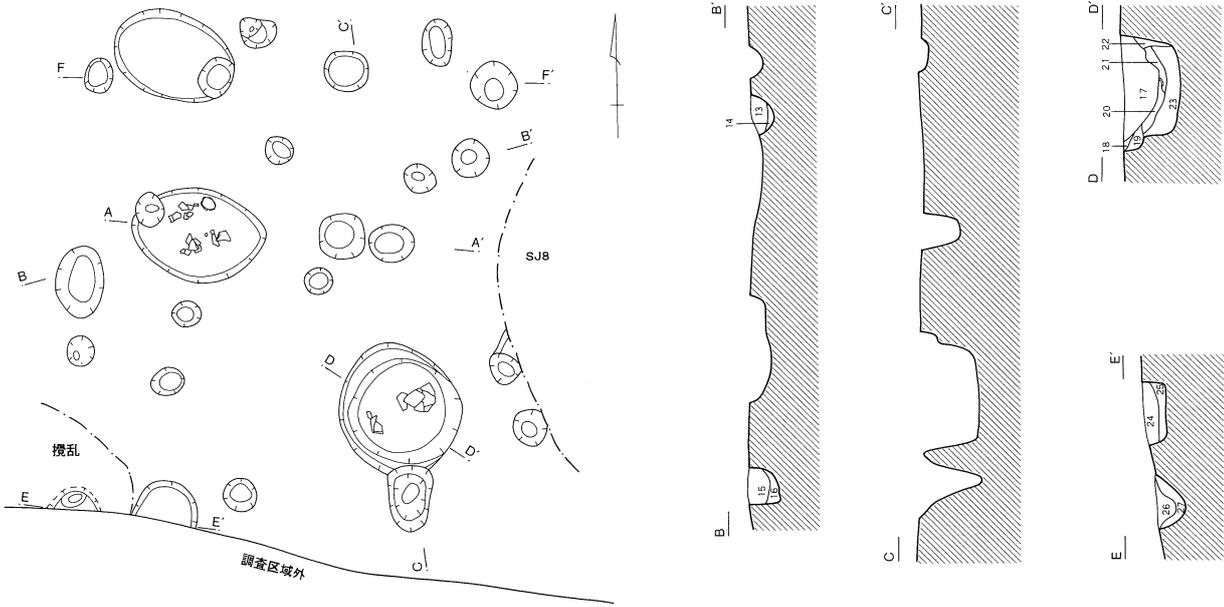
遺物は主として炉跡と、D断面にかかる土壌状の落ち込みで151点の土器が出土した。第6図2～8の前期から中期初頭の破片は、多くが遺構確認の際に出土したもので、9の加曾利E系前葉の撚糸施文土器も同様である。大半は、加曾利E系終末の縄文施文系列と、称名寺系土器であり、後者は、区画内の要素として縄文、刺突、無文の三者があるが、最後者が最も多く、格子状文も含まれる。

このうち、土壌状の落ち込みからは1の加曾利E系

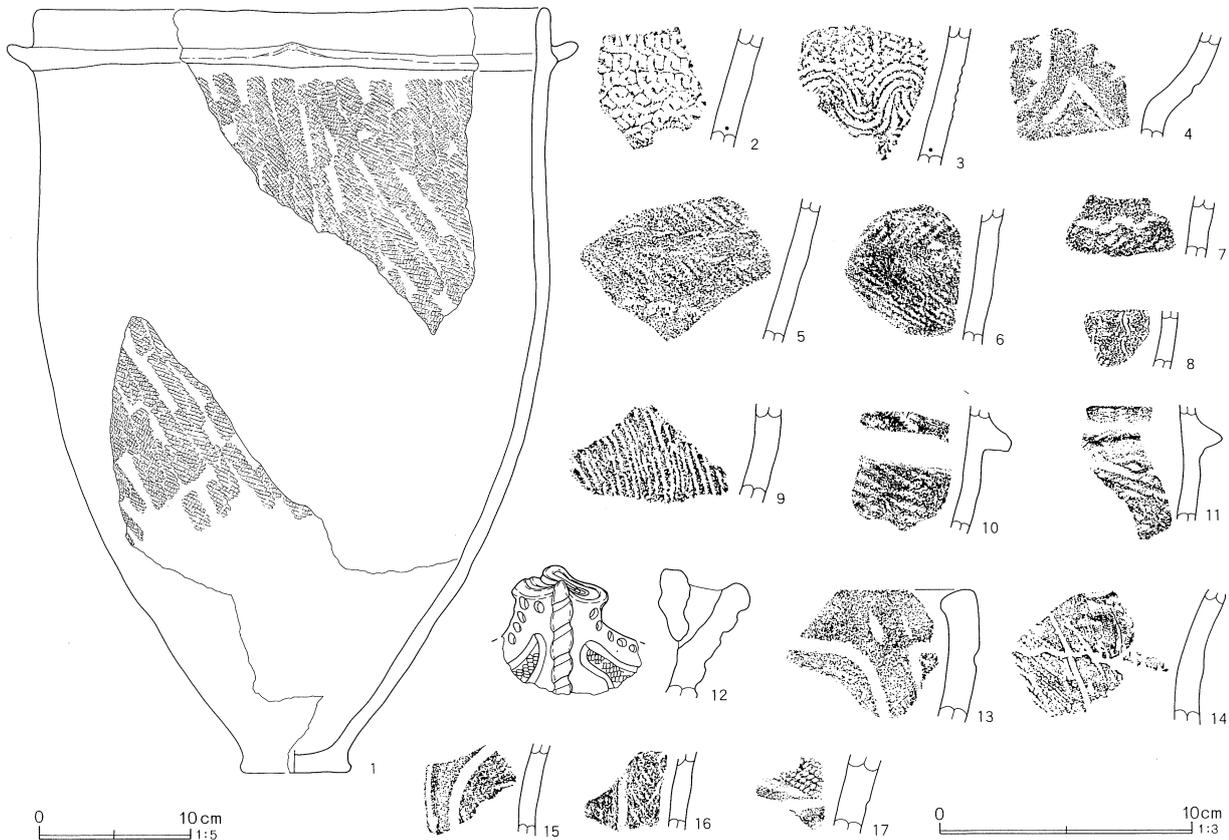
第5図 第3号・第4号住居跡



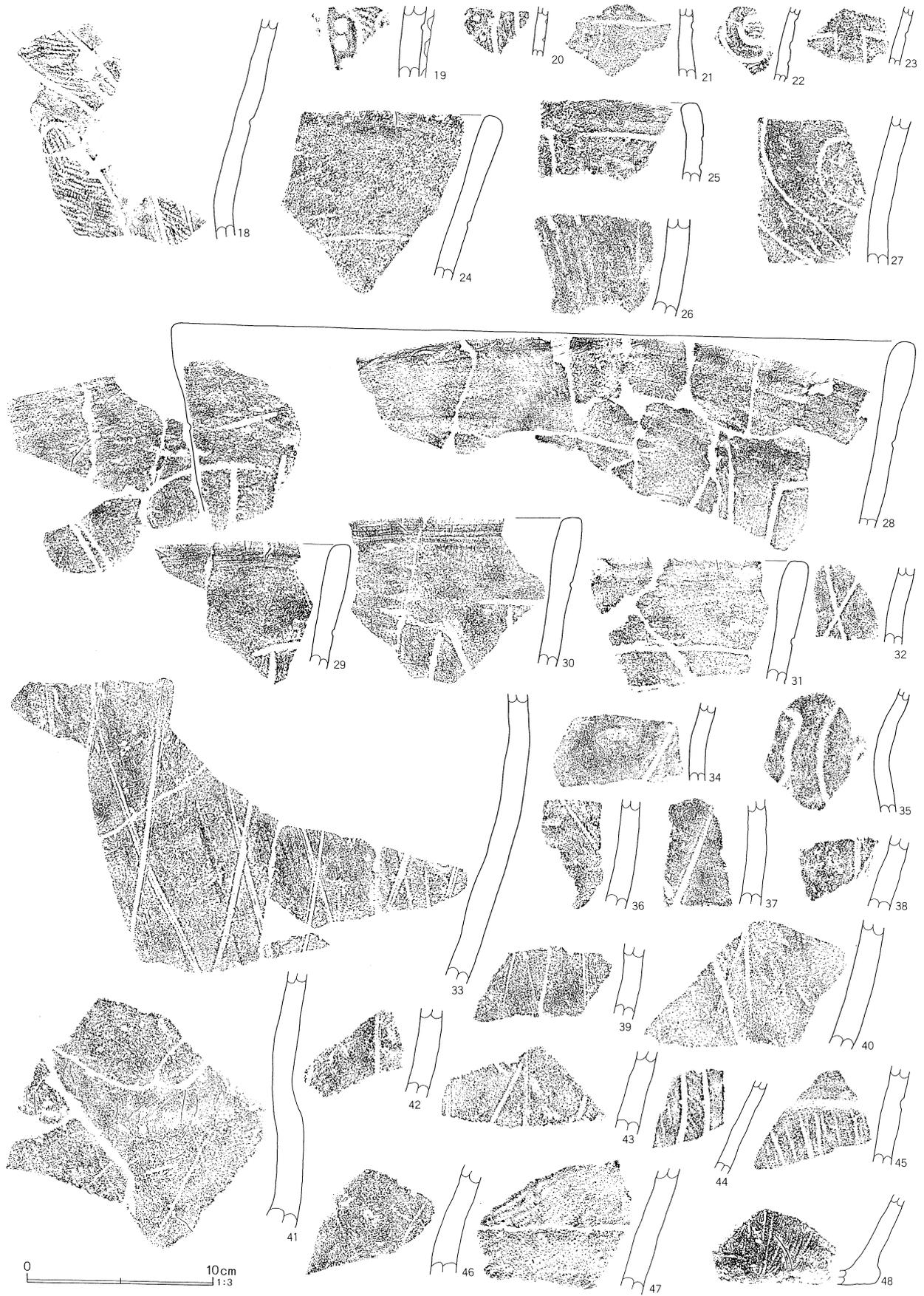
第6图 第5号住居跡



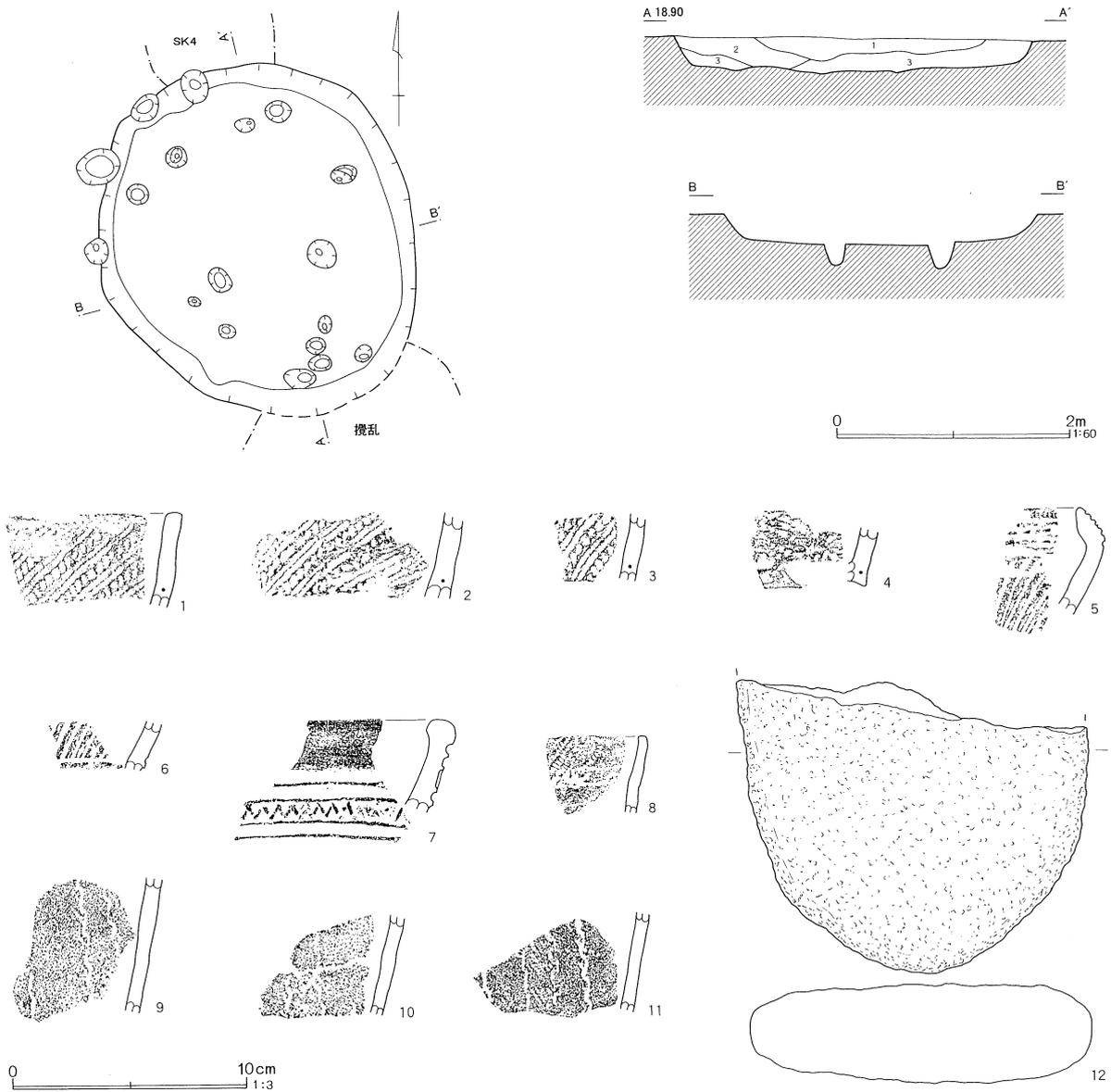
0 2m 1:60



第7图 第5号住居跡出土土器



第8図 第6号住居跡

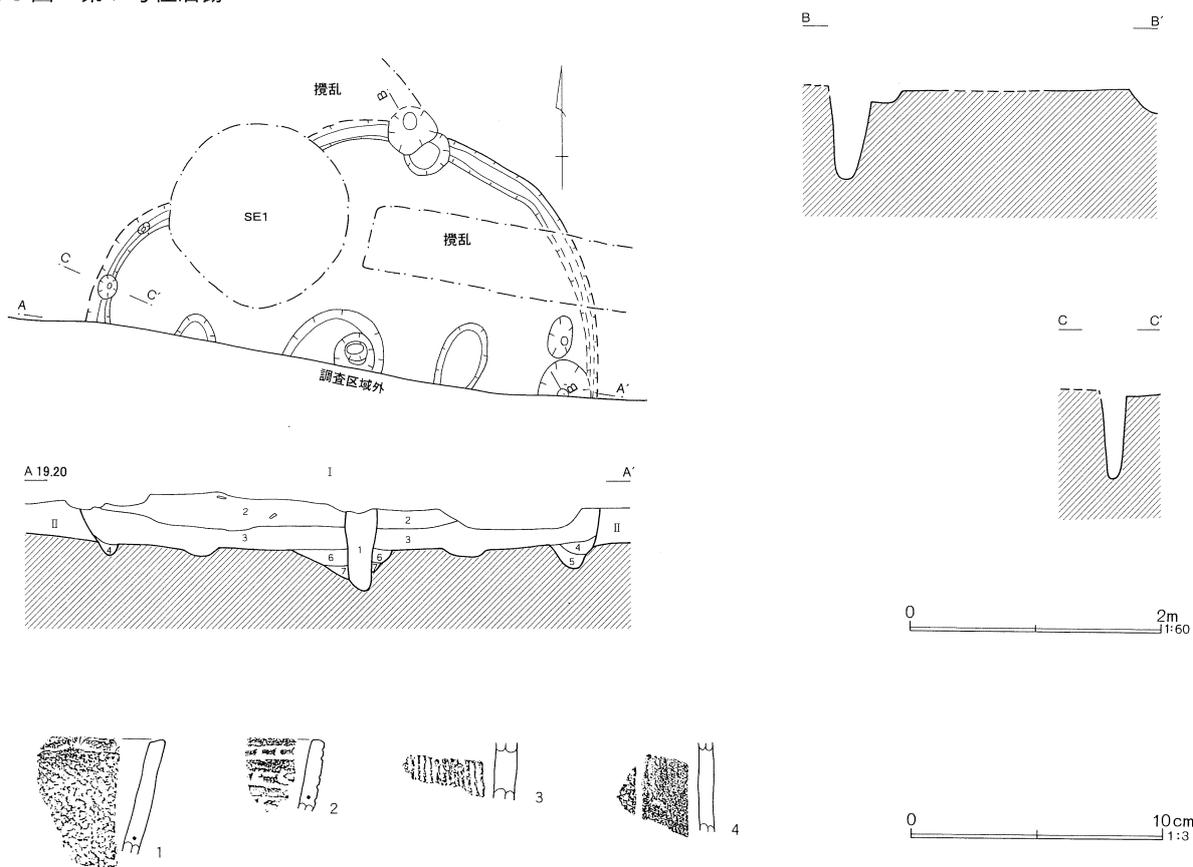


とともに14・15・18の称名寺区画内縄文施文系列が出土している。無文となるのは35の1点のみだが、これとても他に比して曲線的な描線が残されている。対して、炉跡からは、28～31の同一個体の無充填区画文や33・40などの単沈線格子目文が出土している。両群には時間差が想定でき、その点ではD断面を単独の土層として扱うべきであったかもしれない。住居跡としての構築期は、炉跡出土の28などから、称名寺後葉期となるだろう。

第6号住居跡（第8図）

D・E-6グリッドにまたがって発見した。南の上層を攪乱に破壊され、北方では第4号土層と重複する。同土層との先後は把握できなかった。平面形態は径3.00m前後のほぼ円形、確認面から床面までは0.28mを測る。覆土は、上層で黒褐色、下層で褐色土が主体となり、下層ほどローム粒子を含む。床面には14本の小穴を発見したが、いずれも浅く、B断面にかかる2穴が最もしっかりしており、主たる柱穴の一部として機能していただろう。炉跡は設けられてなかった。

第9図 第7号住居跡



遺物は、覆土中より土器が30点、チャート・黒曜石の剥片が3点、磨石が1点出土した。土器は前期のものがほとんどで、関山および十三菩提式周辺に二分される。第8図1～4は関山式で、4の組違いを除き他は異条斜縄文が施文されている。これに対し、5～11は十三菩提式と周辺の個体で、5・6は上下の部位にあたり、開花する口縁下の斜沈線帯を推測できる。また、7はソーメン状浮文によって口縁下の横位帯を構成する。さらに、8～11は縄文のみの破片だが、8は輪積み痕残す器面に横位の単節縄文が施文される。そして、9～11は縦位の綾線文が印されている。

本住居跡の構築期は、出土遺物も少なく断定はできない。だが、土器の二群のうち新期にあたる前期末葉周辺の土器は、今調査での出土相としては最もまともであり、この期に利用された可能性が高く、遺構形態に大きな矛盾はない。また、隣接する第3号住居跡も規模形態の共通から、同期に帰属すると考える。

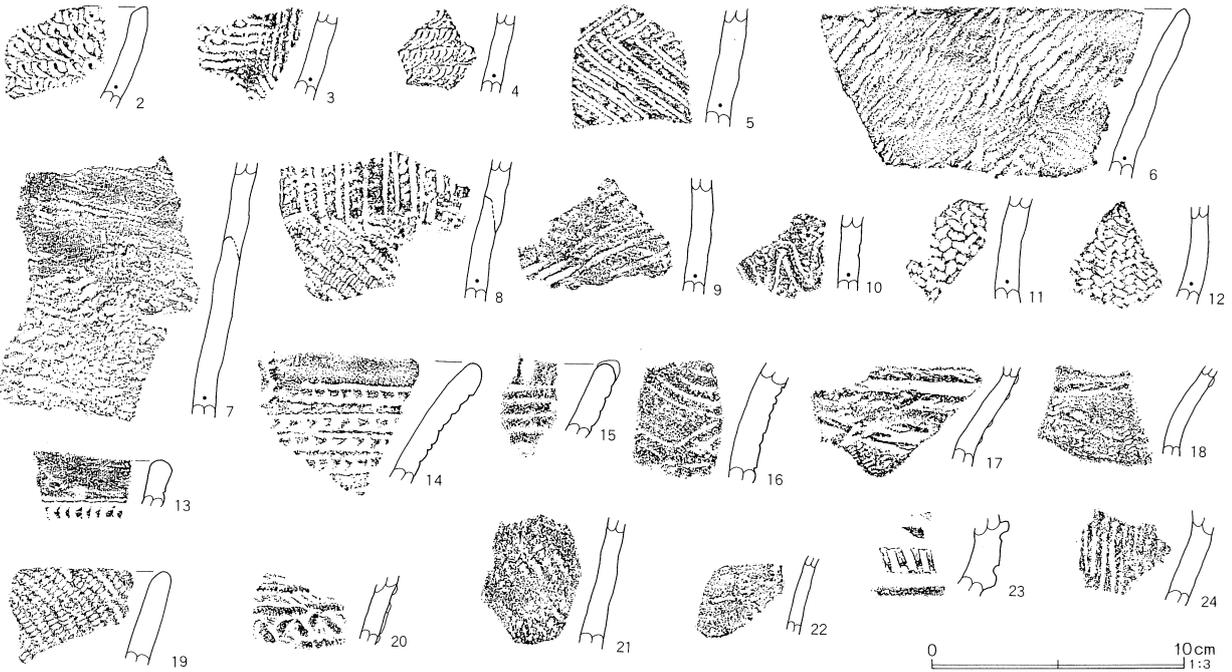
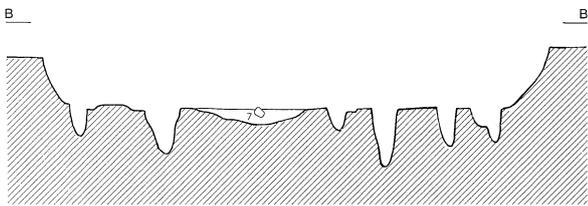
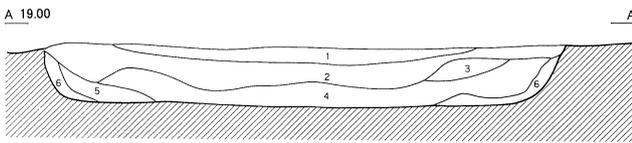
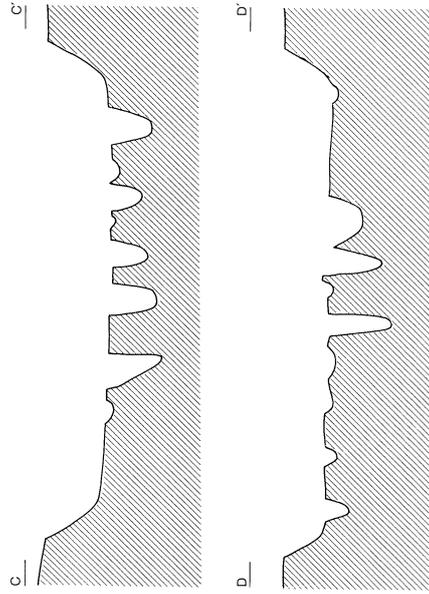
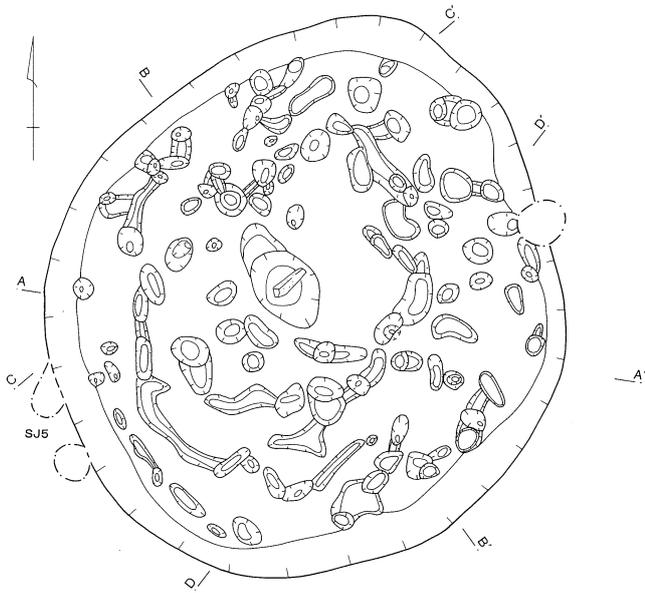
第7号住居跡（第9図）

E-6グリッドで検出した。想定できる規模の半分が調査区外にかかるが、4.20m前後の円形となる竪穴が想定できる。上位は攪乱が多く、加えて中世の第1号井戸も重複し、覆土が満足に遺存していたのは調査区壁際の一部のみであった。

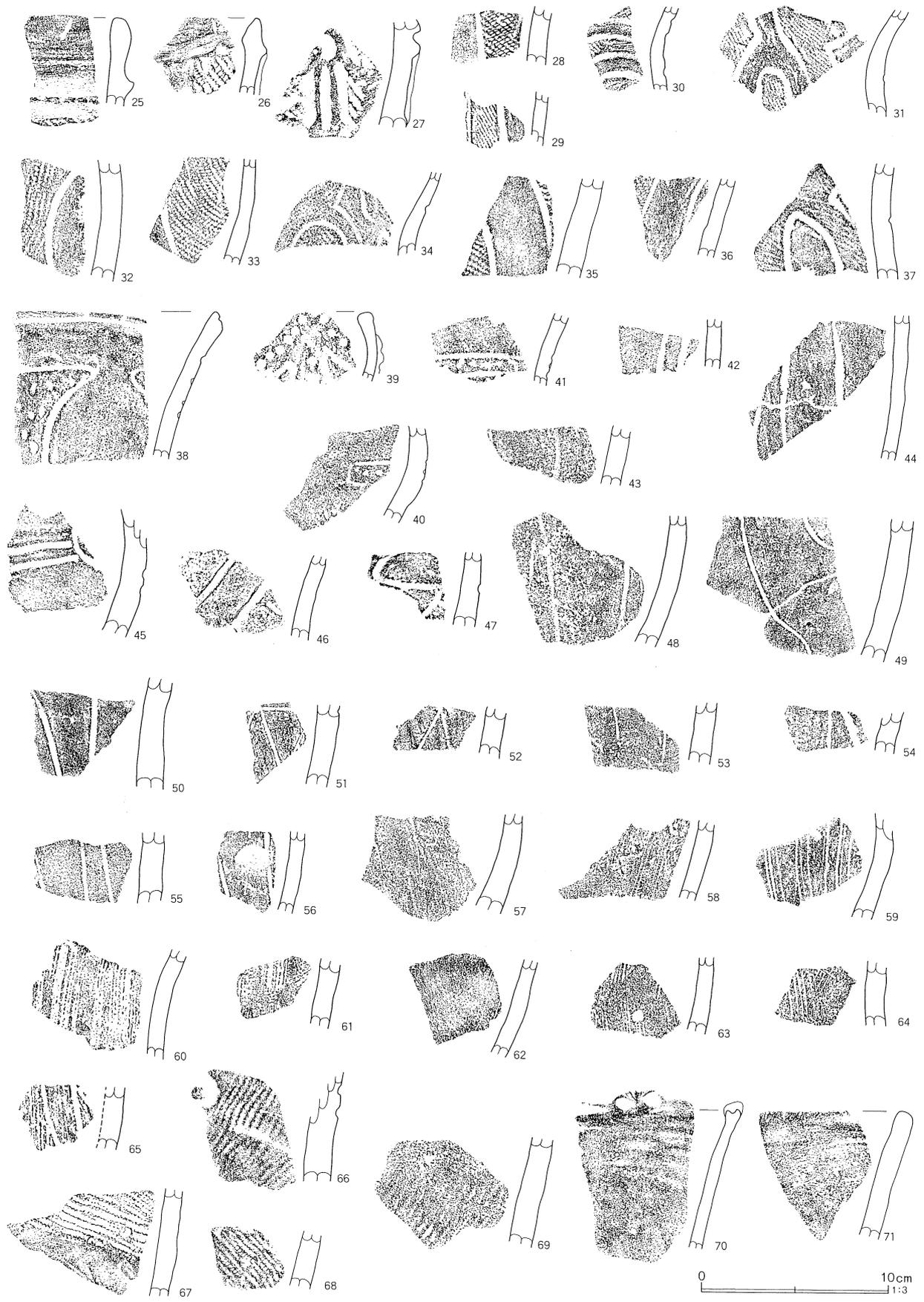
調査区壁の観察では、覆土は第II層漸移層堆積位にも形成されており、炭化物が多く混じる黒褐色から灰褐色土であった。また、炉跡は断面播鉢状で、褐灰色を主体とする焼土粒子多く混じる土が堆積していた。床面には他に全周が想定できる壁溝と6個所の小穴を確認したが、深い小穴は壁溝と重なり合う。

遺物は土器のみ14点出土した。第9図1・2の前期から、3の中期、4の後期までのものがあるが、いずれも小片で、構築期判定には直接利用できない。全周する壁溝に加え、これと重なる柱穴などから、3が指し示す加曾利E系前葉期の可能性が最も高い。

第10图 第8号住居跡



第11图 第8号住居跡出土土器



第8号住居跡（第10・11図）

C・D-6グリッドで発見した。上位に攪乱が及んでおり、第2号・第5号住居跡との先後は確認していない。形態は径4.50m前後の円形で、確認面からの深さは0.47m、覆土は、最上層の黒褐色から下層の灰黄褐色土へと明度が増す。ローム・焼土の粒子を含み、下層ほどロームブロックの混入が多くなる。

床面には多くの柱穴類が確認できたが、壁溝状の掘り込みを含め、いずれが組となるかを確定できなかった。炉跡は、皿状の地床炉だが、褐灰色の覆土の下に赤く焼けた炉床は形成されていない。しかし、炉辺石の存在から炉跡であることには疑いない。

遺物は土器136点、ホルンフェルス剥片1点が出土している。第10図1は鶺鴒ヶ島台の有段深鉢で、2～12は羽状縄文系の土器群である。このうち3は多段のループ文で鋸歯を描出する。また、13～19竹管文系の土器で、13～16は朝顔形開口の爪形文・沈線文深鉢、17・18は時期やや降る浮線文土器である。さらに、20～22は前期末葉の土器で、20は結節浮線文の横帯が残る。そして、23・24は加曾利E系前葉の土器で、23は楕円区画文の一部、24は撚糸文が施文されている。

これに対し、後期段階の土器は、25・26の加曾利E系終末の所産と、伴出する区画内縄文充填の称名寺式土器(28～37)、さらには区画内刺突文充填(38～41)、無充填(42～44・46～50他)、単沈線格子文(51～56)など、雑多なものが混在している。また、57～65は条線文土器、66～69は縄文施文土器だが、66には蕨手沈線的一端がみえ、27の堀之内I式と近い時期と考えられる。そして、70・71は胴下半に文様帯をもつ甕形土器の口縁部で、おそらく45はその一部だろう。

このように、本住居跡出土土器は、早期から後期までの多種が混在している。しかも、多くが確認面から覆土上層にかけての発見であり、中層以下から出土したのは早前期の小片のみであった。したがって、出土土器から構築期を決するのは困難である。竪穴の形態や深さ、柱穴類、炉跡の断面形などを総合すると、本住居跡は中期後半に築造された可能性が高い。

(2) 土壌

今調査では6基の土壌を検出・調査した。出土遺物は極端に少なく、構築時期を特定できるものは少ない。また、6基は円形から楕円形そして不整形など、まちまちで、形態や断面形から構築期を推測できるものもない。ここでは、これらに共通する覆土の特徴から、取り敢えず縄文時代の所産と仮定し、報告する。

第1号土壌（第12図）

C-5グリッドの東南方で検出した。周囲はすべてが攪乱された状態であったが、これを免れたわずかな部分より存在を把握し、規模を推定するに至った。壙底は全面とも破壊されておらず、これによって全体も推定が可能である。開口部は、長径1.00m、短径0.75m程度の円形に近い楕円で、鍋底の断面形で掘り込まれている。最深部は発見面より0.32mで、壙底の北側では小ピットが確認された。

覆土は、暗褐色からにぶい黄褐色土が主体を占め、ローム粒子を多く含む。また、焼土粒子は上層、ロームブロックは下層ほどその混入比を増す。

遺物は、縄文時代前期の土器が1点、同後期の土器が2点、チャートの破片が1点の計4点が出土した。第12図1は前期関山式のループ文上にコンパス文を施した破片である。

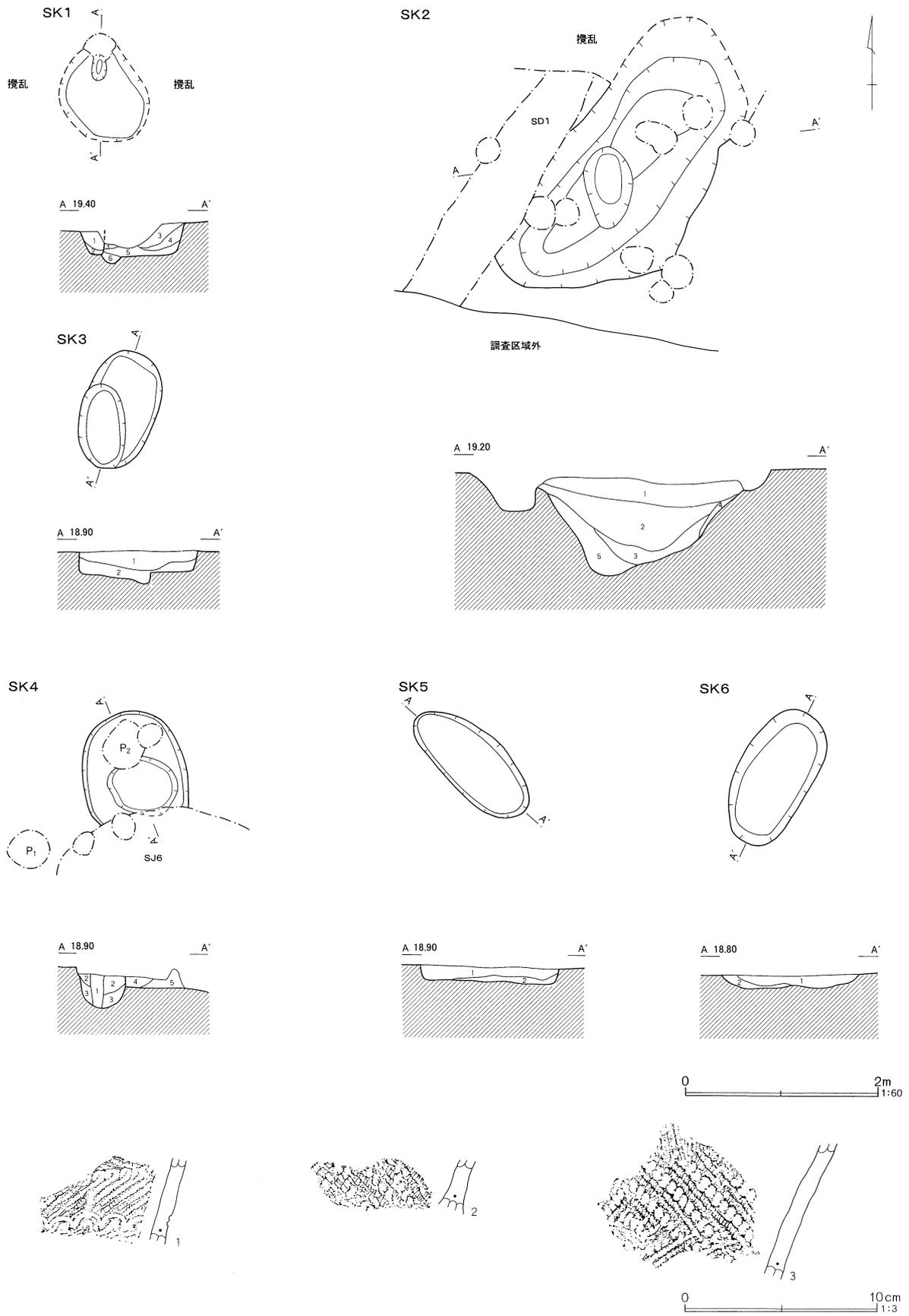
第2号土壌（第12図）

B-6グリッドで発見した。第1号溝と一部重複するが、両者の覆土差は歴然としており、別個に調査が可能であった。

平面形態は長径3.36m、短径1.55mの不整楕円形で、東側に大きく膨らむ。断面形は、深さ1.02mの掘鉢状で、傾斜面などにはいくつかのピットが発見できたが、覆土の特徴から、壙底で発見できたもののみを付帯施設と判断した。

覆土は5層に分層したが、灰黄褐色からにぶい黄褐色土が主流で、部分的にロームブロックを多く含む。遺物は、縄文時代前期関山式土器の小片が1点出土したにすぎない。

第12図 縄文時代の土壌



第3号土壙（第12図）

D-6グリッドで検出した。平面形態は長径1.26m、短径0.77mの楕円形だが、南西に一段深い部分がある。二基の重複のようにもみえるが、断面観察の結果、同一土壙内の偏差と判断した。基本的な断面形は鍋底状、最深部は確認面より0.34mあった。

覆土は、上層灰褐色から下層にぶい黄橙褐色へと黄色味を増すが、多めのローム粒子の混入は変化ない。遺物は出土しなかった。

第4号土壙（第12図）

D-6グリッドで検出した。南側で第6号住居跡と、そして中央部では単独の柱穴と重複する。前者との先後は調査行き届かなかったが、後者とは土層断面で柱穴の後出を確認している。

形態は、径1.00m前後の円形に近い楕円形で、壙底の南に段差を設ける。最深部は確認面より0.34mで、粘性強く炭化物が混じる褐灰色土が主体である。

遺物は、関山式土器が2点、ホルンフェルス剥片が1点出土したのみで、図示できるものはなかった。

第5号土壙（第12図）

D-6グリッドで発見した。長径1.47m、短径0.65mの楕円形で、確認面からの深さは0.16mと、浅い。覆土はローム粒子含むにぶい黄褐色土が主体で、下層ほど黄色味を増す。

遺物は、前期関山式土器が2点、前期末葉の所産が1点出土したが、図示できるものはなかった。

第6号土壙（第12図）

E-6グリッドで検出した。規模形態は長径1.48m、短径0.78m、深さ0.13mと、ほとんど第5号土壙と同一である。覆土はこちらの方がやや黒味強く、ローム粒子を多く含むにぶい褐色土が主体である。

遺物は、関山式土器が2点、後期の土器が1点出土した。第12図2・3は同一個体で、正反の合による羽状縄文を施す胴下半片である。

(3) ピット（第13図）

調査区の東寄りでは、住居跡だけでなく、縄文時代に穿たれたと考えられるピットが多数発見できた。同じくピットが集中した第4号・第5号住居跡は、炉跡を中心として住居跡と認定したが、こちらは住居跡と認定する明確な根拠がない。壁の立たぬ住居跡は後期に多いが、これらの中には前期関山式土器の大片を出土したものもあり、一律な組み合わせの認定は困難である。また、関山式期の遺跡における単独のピットの検出は極めて少なく、あるいは土壙や住居跡の一部柱穴となるのかもしれない。いずれにせよ、発掘・整理段階では明確な判断を下せなかったため、ここでは単独のピットとして報告する。

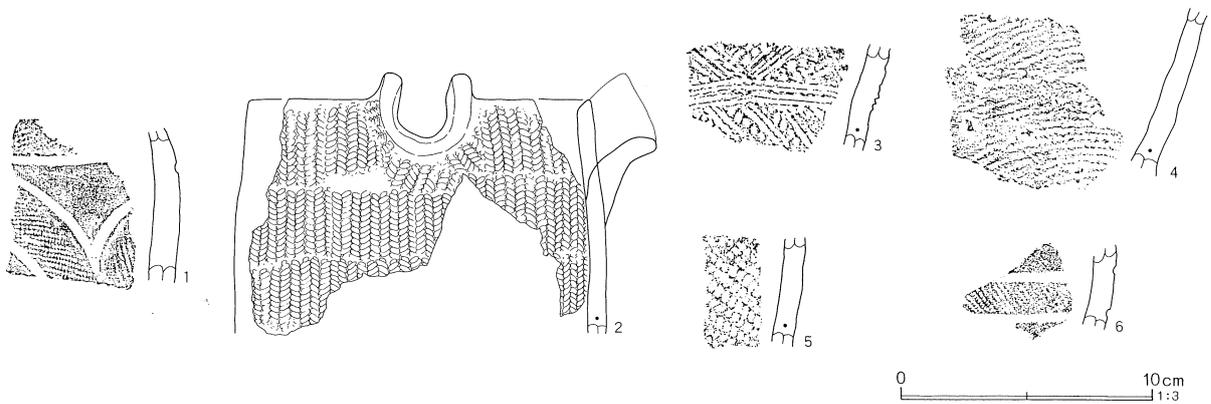
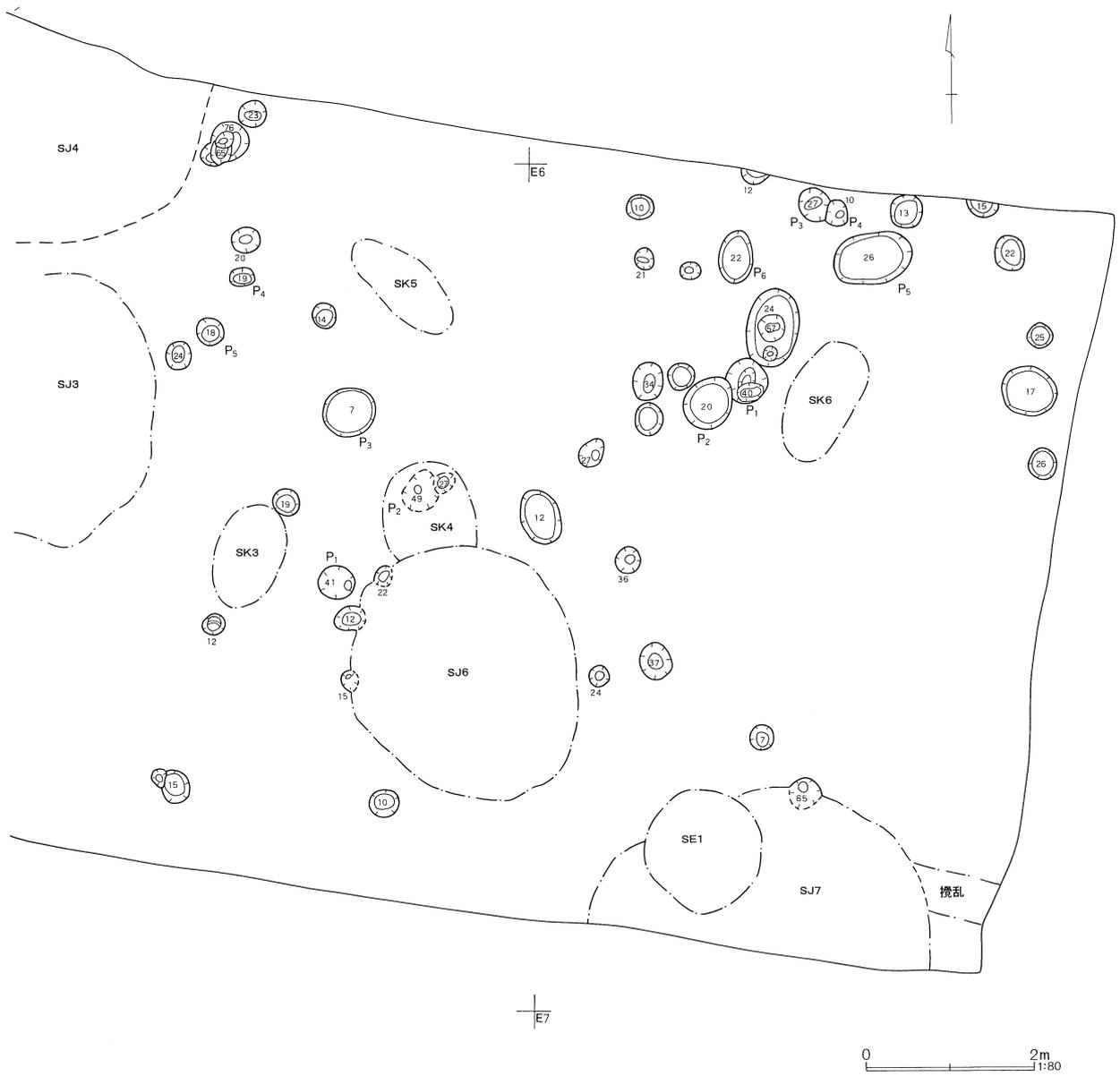
これらの開口部形態は、柱穴様の小規模なものから、小土壙といえるものまで様々だが、極端に深いものはない。構築期はまちまちと考えられるこれらも、覆土はおおよそ共通しており、上層にはローム粒子を少量含む灰褐色土が堆積していた。

遺物は極端に少なく、出土したのは検出できたピットのうち半数に満たない。しかも小片が多く、はっきりとした時期判定はできない。このうち、D-6グリッドのP5よりは関山式土器1点が出土しているが、第13図2に示したとおり、組紐文を施文した片口注口土器の大片であり、構築期を反映しているものと判断して大過ないだろう。

D-6グリッドの他のピットからは、P1よりチャートの剥片1点、P2より後期の土器1点、P3より中期の土器1点、後期の土器2点が出土している。また、E-6グリッドのピットでは、P2で関山式土器1点、P3で同2点、P6で羽状縄文系後半期の土器1点、P7では後期の土器が1点出土した。

第13図1・6は、D-6P2・E-6P7より出土した称名寺式土器で、いずれも沈線による区画に縄文を充填している。同図3・4はE-6P3より出土している。前者は正反の合を地文として櫛状工具による文様帯を設定する。また、5はP6のもので、無節縄文の単一施文である。

第13図 縄文時代のピット



(4) 遺構外 (第14・15図)

遺構外よりは、天箱換算で2箱相当の土器や石器が出土した。チャート・黒曜石の剥片類6点と、第15図に示した6点の石器を除き、他は土器であり、前期前半から後期前葉にかけてのいくつかの時期の所産が混在している。なかでもその初めと終わりの比率が最も多く、前期後半から末葉、中期後半がこれに続く。

第14図1～24の前期前半の土器は、いわゆる関山Ⅱ式を中心として黒浜式土器を一部含む。1～4はループ文を施文するが、1・2は多段ループによって菱形状文を構成する。5～10はいわゆる正反の合原体を施文するもので、11～21は組紐系の原体を施文具に使用したものである。後者のうち、16～20は四本組紐そのものではなく、組み違えを施文している。また、21は、0段2条の単節縄文のようにも見えるが、節が独立しつつ切り立っていることから、0段縄を意図的に組み違えた原体(高橋1992)かもしれない。一方、22・23は黒浜期に相当すると考えられる口縁部文様帯部だが、前者は櫛のような工具を使用して刺突系の施文を残す。さらに、24は整形接合部を取り繕うために縦位の単沈線を施文している。

これに対し、前期後半から末葉は、時期・系譜を隔てた散発的な出土であった。25・26は諸磯b式段階のキャリパー形沈線文土器で、27～30は十三菩提段階の所産と考えられる。ただし、29・30は、胎土の特徴と竹管施文、さらに29の弧線内側の肉彫様の文様だけが根拠であり、詳しい構成は判断つかない。一方、31～37は主として前期末の縄文施文土器である。ほとんどは結節部の回転による綾線文が印されているが、31～34の横位、35・36の縦位の二者がある。31は口縁直下の隆帯部と判断でき、37は結節部回転押捺のない縦位施文のみの破片である。

同じく前後期のはざまを埋める中期後半周辺に相当する土器の出土は極めて限られており、加曾利E系の変移でみれば、その前葉と、後期段階の終末期とに二分される。38～41は前者に相当するが、38はキャリパー形土器の口縁部文様帯渦巻部、39は連弧文土器、

40・41は現状で撚糸文のみが残る破片である。また、42～45は同終末期の個体で、後期初頭の称名寺系土器に伴うものと考えられる。前三者は、それぞれ別個体だが、口縁下に三角状の隆帯をめぐらし、以下の全面に縄文を施文するもので、44はおそらく四単位であろう突起部の破片である。そして、45は称名寺系とも考えられるが、縄文原体の太さは、今回出土の同系土器では他に類するものがない。そのため、加曾利E系の範囲に含めて考えた。

これに対し、46以下の後期前葉は、今回出土土器のなかで最も多きを占めるが、詳しくみると称名寺から堀ノ内Ⅰ式期までの所産を含む。全体では、縄文施文がふるわず、沈線のみで文様を構成する個体が多い。46～51は、沈線区画の内側に縄文あるいは刺突系の施文などの充填文を加えるものである。このうち47・50・51は隆帯も絡めて文様を描出するが、詳しい構成は判断できない。49は口縁無文の甕形土器の括れ部とも考えられる。

一方、52～72は単純開口もしくは胴中位で緩やかに括れる典型的な器形となると考えられるが、53の口縁直下で蕨手文が加えられるなど、単純には判断できない。全体の文様は称名寺系本来の剣先やX状の区画文(52・57・59・70など)や単線による格子目文(62・66など)があるが、充填文をもたないだけに、破片内で断定できないものが多い。そして、73・74は胴下半にのみ文様をもつ甕形土器の口縁部片である。

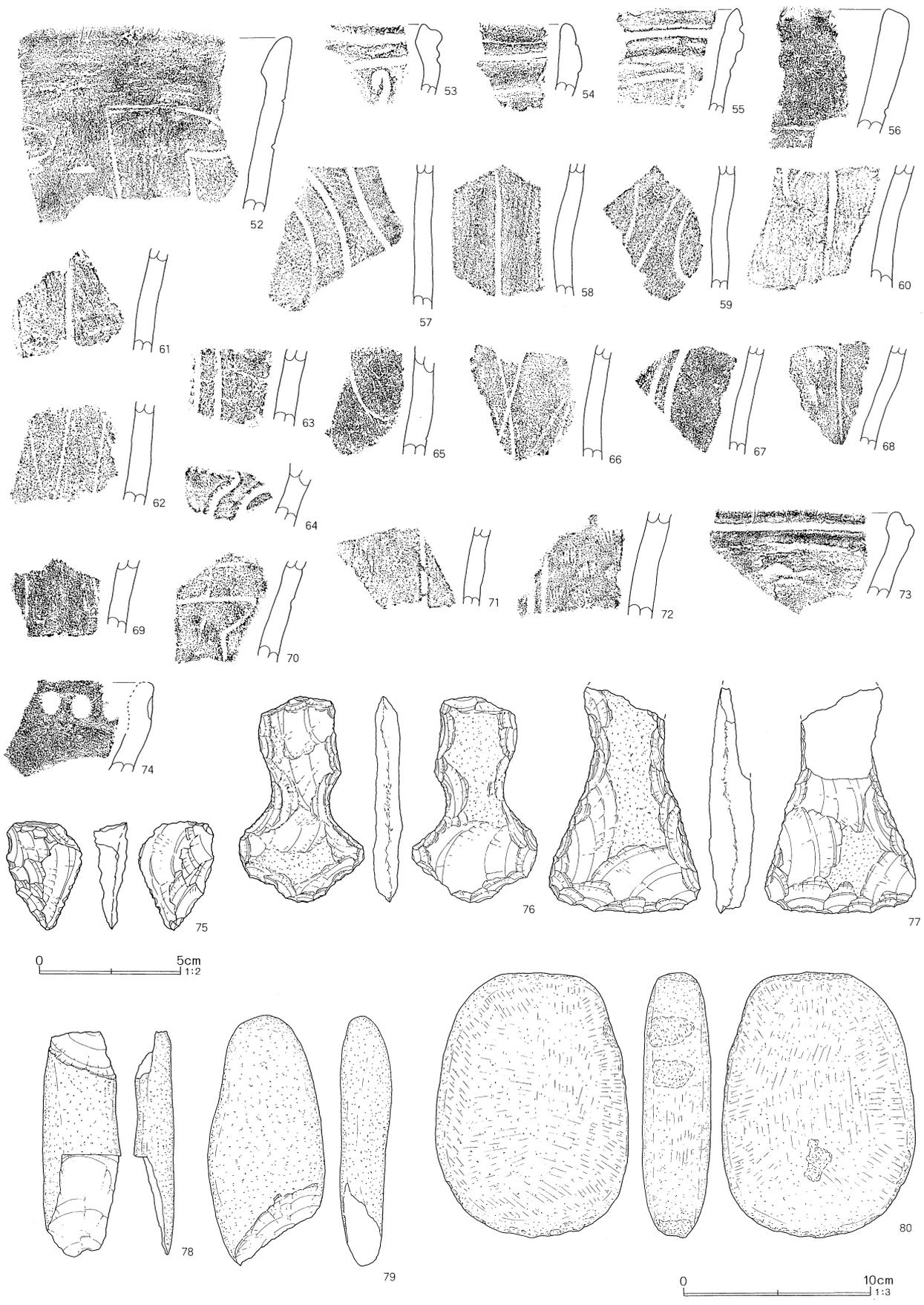
前述のとおり、剥片類を含む石器類は12点が出土したが、第15図には製品類すべてを図示した。75はチャート製の削器で、二等辺三角形に剥がされたやや横長の剥片の打点方向を握り部に、縁辺部を細調整して機能部を作出している。一方、76・77は打製石斧で、いずれも扁平な自然石の外周を加工し、76は分銅、77は撥形の外形を整える。76は凝灰岩、77はホルンフェルス製。また、78・79は敲石で、78は両端に衝撃による剥落が残る。いずれも砂岩の棒状自然石をそのままに利用している。さらに、80は閃緑岩製の磨石で、側縁の三方には敲打痕、一部には磨耗痕も残る。

第14図 遺構外出土土器 (1)



0 10cm 1:3

第15図 遺構外出土土器（2）・石器



2. 平安時代以降の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第16図）

B-5・6グリッドで検出した。ほぼ方位軸に沿った3.83m×2.48mの長方形竪穴の東壁南寄りにカマドを設ける。第16図に示したとおり、同一の竪穴をかさ上げて再度利用しており、上層住居跡を設ける際にはカマド煙道を延長し、南東隅に棚状部を新設する。かさ上げは、深さ0.50mあった当初の床面から0.25mほど埋め戻して貼床している。

下層住居跡の覆土は、ローム粒子含む灰褐色から灰黄褐色土で、ローム粒子・ブロックを少量含む暗褐色土を主体とする上層住居跡と明らかな色相差がある。上層の覆土は同時期の第2号住居跡と通じ、自然堆積と見なせる。これに対し、歴然とした色相差をもつ下層住居跡の覆土は、遺存状況も考えあわせれば、下層利用時から間隙のない埋め戻しと判断できる。

上層のカマドは、全体に暗褐色を主体とする同色調の土が覆土となる。第5・7層に焼土が大量に含まれており、前者が天井形成部、後者が燃烧灰と天井剥落による堆積物と判断できる。しかし、下層カマドでは、堆積土の彩度や明度がめまぐるしく変化しており、住居再構築に際して天井をつぶされ、封印された姿と考

えられる。このうち、黒褐色の第16層とにぶい黄橙褐色の第15層には焼土が大量に含まれており、それぞれ使用時の燃烧灰および天井剥落堆積物、天井部形成土と推測できる。また、灰褐色の第14層は他覆土と共通しており、カマド破壊後の最終的な埋め戻し土となるだろう。ソデは、下層で掘り残しの側壁台部が発見できたが、上層ではその痕跡を発見できなかった。

下層住居跡に覆土には、これを断つ噴砂が残っていた。断面図の一部では上層住居跡に到達しないようにもみえるが、上層調査の段階ではその存在を確定できておらず、また、A断面にかかる噴砂の周辺では床面が多少盛り上がる傾向があった。このことから考えると、噴砂を招いた巨大地震は、上層住居使用時以降に発生したと考えられ、床面のかさ上げが地震を契機として行われたのではないことが判断できる。

遺物は、須恵器坏3個体、大甕1個体、土師器甕3個体程度の破片が出土している。まとまっているのは下層カマド出土の土師器甕と、カマド付近出土の土師器甕のみであるが、後者は、胴部ばかりで図示していない。他に砥石が1点出土しているが、これを含め図示したすべては下層住居跡からの出土である。

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

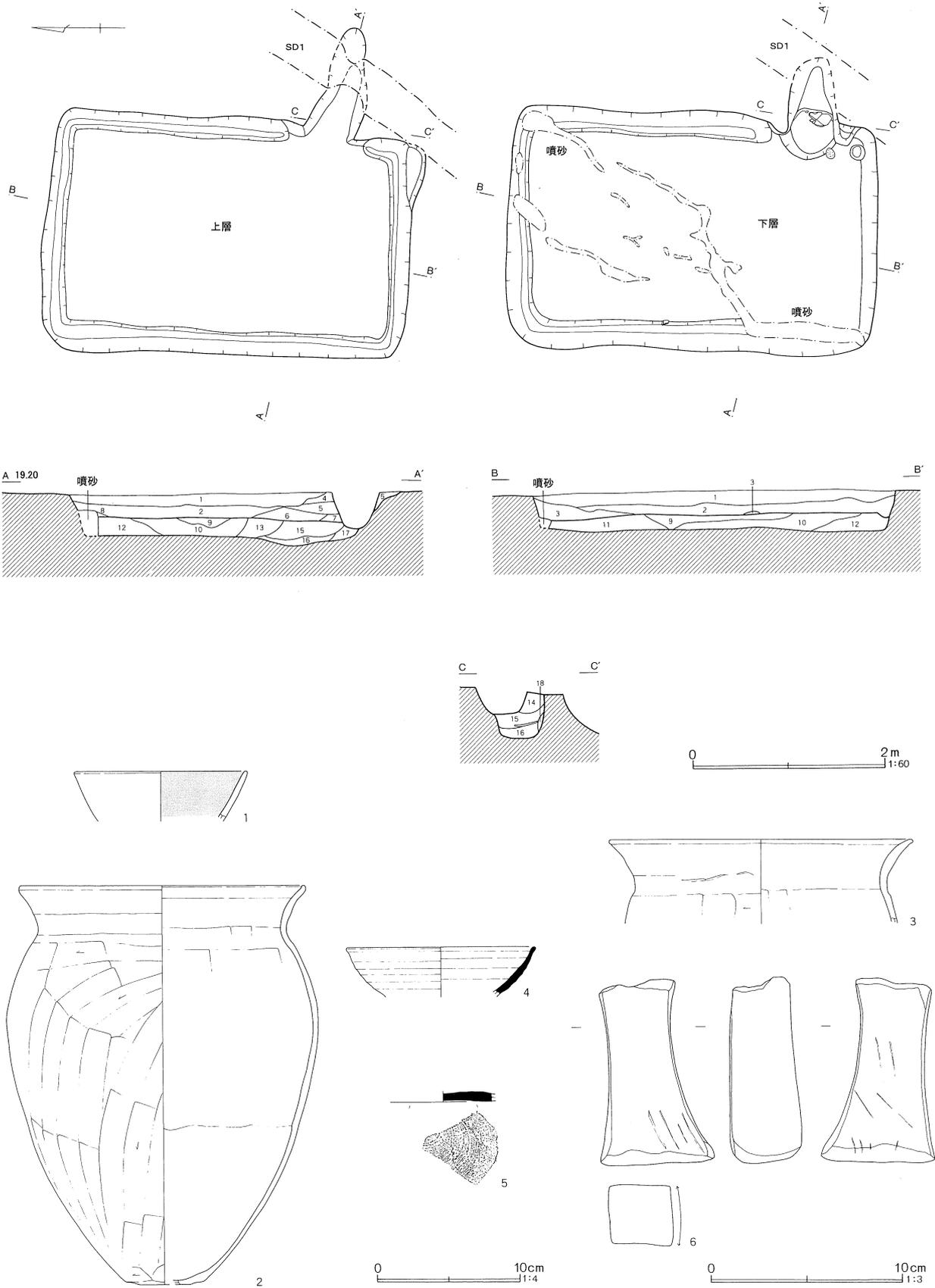
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.5		A E H	3	橙	15	内面黒色処理
2	甕	(20.0)	28	(5.3)	A D E H I	1	明赤褐	20	下層カマド
3	甕	(21.0)	5.9		A D E G	2	明赤褐	10	
4	須恵坏	(13.0)	3.5		A B F	2	灰	25	下層カマド 南比企産
5	須恵坏		0.7		E I	1	灰	25	南比企産
6	砥石	長9.7cm 最大幅6.0cm 厚さ3.7cm 重量243.3g				凝灰岩	下層		

第2号住居跡（第17図）

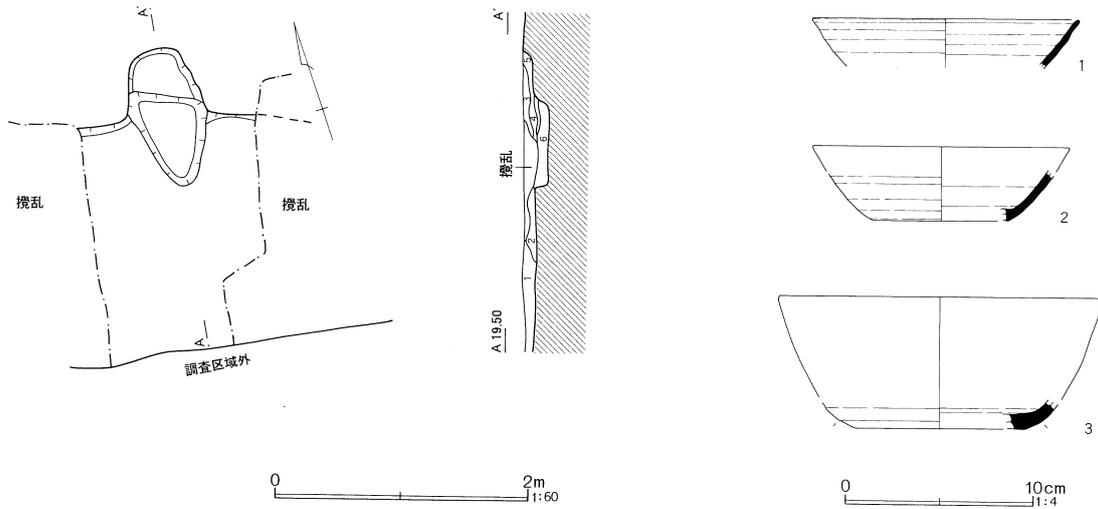
C-6グリッドで検出したが、三方を破壊され、カマドと一部床面が残るのみであった。覆土は暗褐色から褐色で、焼土粒子を多く含む。より暗いカマド部の堆積も薄く、天井崩落の過程を復元できない。

出土遺物は極端に少なく、須恵器坏4個体と土師器甕1個体の破片が出土したにすぎない。他に、重複する第5号住居跡に帰属する可能性が高い縄文土器が40点出土しているが、個体別の判断がつかないため、遺構外で紹介している。

第16図 第1号住居跡



第17図 第2号住居跡



第2表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(14.0)	2.6		E	1	灰	10	東金子産
2	須恵坏		2.7	(7.0)	C E F	2	灰褐	20	南比企産
3	須恵碗		1.6	(9.0)	B E F	1	黄褐	10	南比企産

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第18図)

E-6グリッドで発見した。全面が攪乱におおわれていたが、その一部を掘り進んだところ、被害は意外と少なく、開口部の大半が確認できた。縄文時代の第7号住居跡と重複するが、その覆土差は歴然としていた。そのため、両遺構は別個に調査した。

確認面での開口部は径1.40m強の円形で、深さは確認面から1.73mあった。断面形の基本は筒形で、枠を設けたのか、筒底の中央やや西寄りを一段窪ませる。だが、覆土に変化なく、断定はできない。

上位の覆土は自然堆積で、にぶい黄褐色から最下層の黒色まで、徐々に明・彩度を減ずる。上位四層はロームブロックを多く含み、第5層では酸化鉄の沈殿の痕跡がみられた。また、最下の第6層はシルト質で、植物質の混入が顕著であった。

遺物は常滑甕片が1点と縄文土器が出土した。前者は図示できなかったが、図版に示してある。

(3) 溝

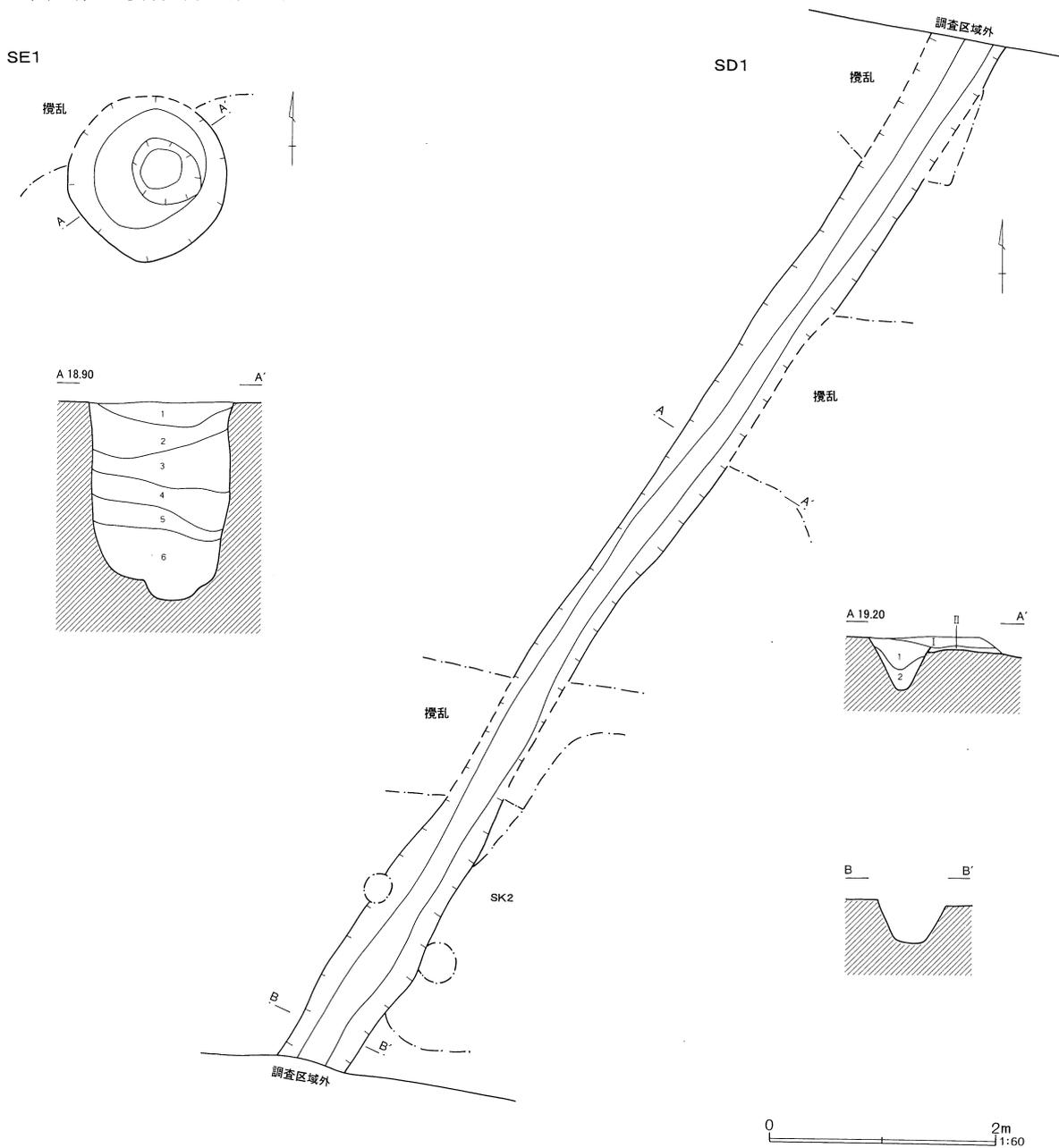
第1号溝 (第18図)

C-5からB-5・6グリッドにまたがって、調査区の西端を南北に縦断する。その指し示す方位はN-34°-Eであり、角度からすれば、前回報告(大谷1999)の第8号溝に接続すると考えられる。第1号住居跡と第2号土壇と重複するが、両者よりも新期に構築されたことは歴然としていた。

断面形はV字状で、調査区内では直線状にのびている。深さは確認面より0.50m内外で終始しており、南北での標高差もない。

遺物は、埋没時に混入したと考えられる縄文土器がわずかに出土し、加えて第1号住居跡カマド脇の溝上層で土師器甕の大片が出土した。だが、これは、本溝が破壊した住居跡カマド部に埋まっていたものと考えられる。構築期に直接かかわる遺物は出土しなかったと判断した。

第18図 第1号井戸跡・第1号溝



(4) ピット (第19図)

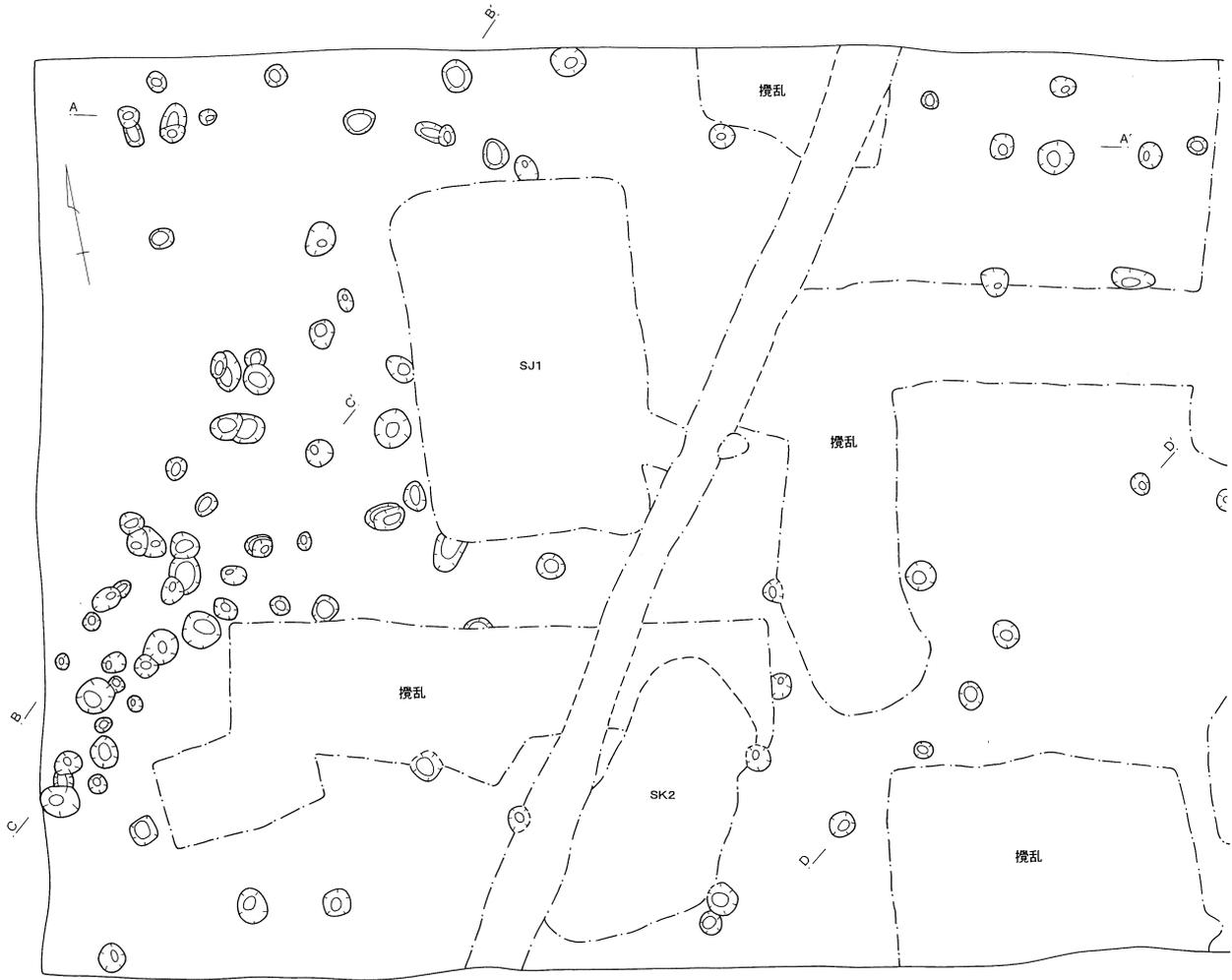
調査区の西方で発見したピット群は、出土遺物が全くなく、構築期の確定はできない。しかし、覆土の特徴から、中世、あるいは近世に掘削されたと考えられる。分布は西方ほど密で、漠然とだが、北東から南西への方向性をもっているともとれる。開口部径は細く、確認面からの深さが0.3~0.4mのものが多い。

覆土は、暗褐色から黒褐色系の土で、いくつかでは柱痕も観察できた。また、覆土の特徴に通ずるものも

あるが、これらの組み合わせでは建物跡は成立しない。さらに、覆土の特徴を無視しても、構造物として確信のもてる取り合わせは認められなかった。

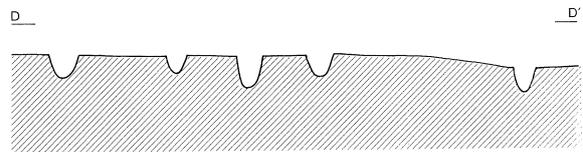
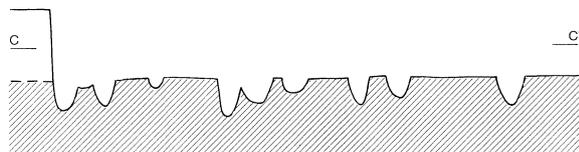
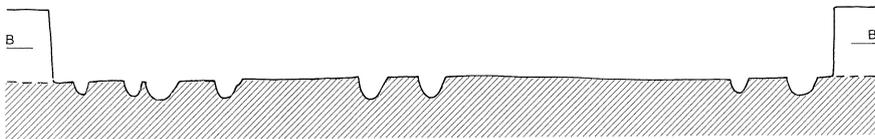
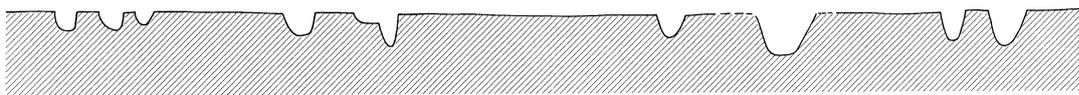
そのような中、断面線Dとその延長上の計7穴は、周囲に他穴が分布しない中、前述の方向線に沿った直線化の兆しをみせる。だが、間隔はまちまちで柵列とは認定しがたい。この東では、極端に分布が減少することを考えあわせれば、少なくとも、ピット群の東限を表すことだけは確実なようである。

第19図 中近世のピット



A 19.40

A'



V まとめ

今回の馬場裏遺跡第23次調査では、限られた狭い範囲ながら住居跡8軒という成果を得ることができた。第Ⅲ章でふれたとおり、本遺跡は、行田市教育委員会を中心とする過去22次にわたる調査によって、遺跡の概要が判明しつつある。今回の調査はこれらの見通しをさらに固くするとともに、新たな発見も加わった。

これまでの調査を総合すると、広大な遺跡範囲のなかでも、本遺跡で早くから注目されていた縄文時代遺構・遺物の分布は、第Ⅲ章で紹介した経緯のごとく、長野中学校を中心とし、進修館高等学校に広がる、遺跡でも北西の一画に限られていることが推定できる。前期は両校をまたぐ狭い範囲で、中期は南にも分布を広げ、後期は分散する。最大の中期でも環状化するような大規模集落とはならないようである。

今回の調査で注目されるのは、前期末から中期初頭の遺構・遺物を発見したことである。少なくとも隣接する第22次では出土しておらず、極めて限定された遺存量と分布範囲を示すと考えられる。今回の報告では、第6号住居跡を、遺物の出土傾向から、前期末の構築と判定した。径3m強の小規模なもので、掘り込みはしっかりしているが、炉跡や、断定できる柱穴をもたない。これは、至近の第3号住居跡にも共通し、両者をほぼ同期のものと推定した。

同期の遺跡は、埼玉県では極めて少なく、住居跡の検出例となるとさらにその数が減ずる。近隣では騎西町小沼耕地遺跡(細田1999)での調査例があるが、県内では他に狭山市八木上遺跡(金子直行1996)くらいしかない。前者では炉跡をともしなわぬ長方形の掘り込みが確認され、後者では壁面が立たないが、遺物の分布から隅丸方形の全体形が推定されている。

本遺跡例は円形から隅丸方形で、小規模な点に特徴がある。長野市松原遺跡(上田1998)などでは4から5mの通常規模の竪穴とともに、炉跡を設けない同規模形態の竪穴が営まれている。主たる居住にあてられない副次的な施設ともとれ、2棟のみが点在するにすぎ

ない本遺跡例の機能的役割に通ずるともとれる。いずれにせよ、今後の発見例が当否を決するだろう。

一方、馬場裏遺跡の古墳時代以降は、縄文時代とは一転、拡大の一途をたどる。古墳時代のうちは縄文の分布をやや南にずらした程度の分布であるが、古代となると、調査地区のほとんどで遺構・遺物が発見されるほどに拡散する。その累積はさしたる密集度とはならないが、第22次調査で発見された瓦堂がこの集落の地位を象徴しているかのようである。

今調査では竪穴住居跡2軒を検出したが、そのうち1軒は、床面が張り直されていた。かさ上げは高く、しかも埋土にのみ噴砂が絡んでおり、うまくすればこれを誘発した地震の年代や、逆に、地震発生時の遺物相のすりあわせが可能であったかもしれない。

しかし、精査当初はそのような認識がなく、観察結果は曖昧なものとなってしまった。本報告では上層(後期)住居の床面の盛り上がりなどから、取り敢えず竪穴の完全埋没後に地震が発生したと判断した。噴砂に破壊された下層住居埋土の出土品は、現在の編年認識では平安時代初頭にあたと判断でき、近隣に大きな傷跡を残した有力候補(堀口1986)とされる弘仁大地震(818年)とは、当面の整合はとれる。

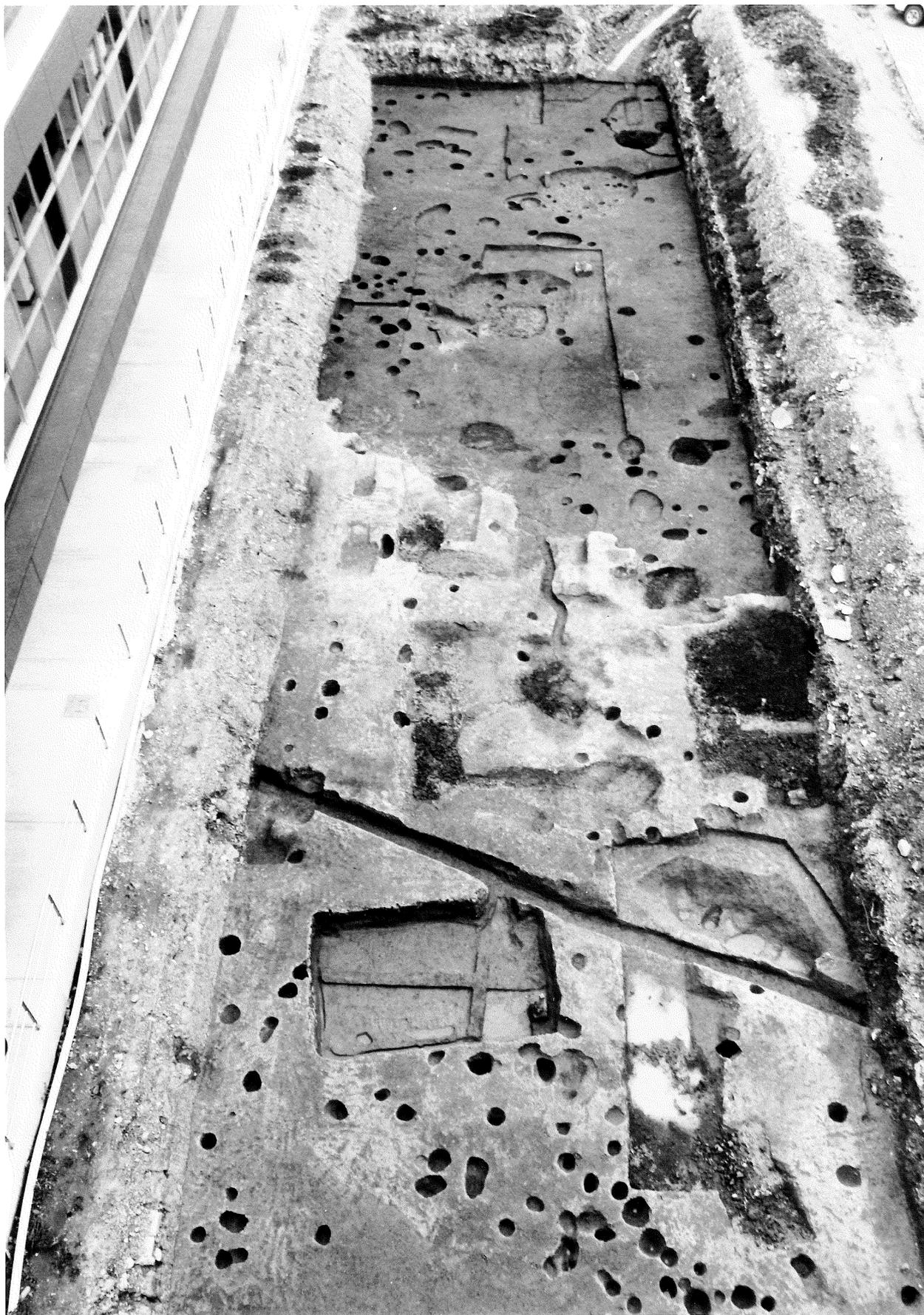
さらに、今調査での中・近世は、調査区の西側に柱穴群が分布しており、微地形の方位性に即した何らかの施設が存在したようである。第22次調査の成果とあわせ考えると、その範囲は広大におよび、両調査で計7本発見された井戸跡とともに、建物空間として利用されたようである。

馬場裏遺跡の範囲内には、成田下総守顕泰以来の長久寺と久伊豆神社が現存しており、その南に隣接する第17次調査地点では折り重なる墓域が発見されている。今回調査で発見された柱穴群は、性格は不明なものの、指呼に居並ぶ両社寺や、現在県道佐野行田線として名残をとどめる日光脇往還やその前身と密接な関わりの中なかで設けられたのは確かだろう。

引用・参考文献

- 上田典男 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4 松原遺跡 縄文時代』
日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター
- 大谷 徹 1999 『馬場裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第230集
- 金子直行 1996 『八木上／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 木戸春夫 1985 『白鳥田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第54集
- 栗岡 潤 1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集
- 栗原文蔵 1963 『古代の行田』行田市郷土文化会
- 栗原文蔵 1978 『原遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第34集
- 栗原文蔵・駒宮史朗 1990 「行田市陣場遺跡の調査」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
- 剣持和夫 1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集
- 行田市教育委員会 1994 『行田市文化財年報 平成4年度』
- 行田市教育委員会 1995 『行田市文化財年報 平成5年度』
- 行田市教育委員会・行田市郷土博物館 1995 『最新出土品展—平成4～6年度の発掘調査の成果—』
- 行田市教育委員会 1996 『行田市文化財年報 平成6年度』
- 埼玉県教育委員会 1987 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(昭和60年度)』
- 埼玉県教育委員会 1990 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(昭和63年度)』
- 埼玉県教育委員会 1991 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(平成元年度)』
- 埼玉県教育委員会 1992 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(平成2年度)』
- 埼玉県教育委員会 1993 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(平成3年度)』
- 斉藤国夫 1975 『日盛徳寺址の発掘調査』行田市文化財調査報告書第2集 行田市教育委員会
- 斉藤国夫 1979 『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第5集 行田市教育委員会
- 斉藤国夫 1980a 『長野中学校校内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第9集 行田市教育委員会
- 斉藤国夫 1980b 『小針遺跡発掘調査報告書—B地区—』行田市文化財調査報告書第10集 行田市教育委員会
- 斉藤国夫 1981 『池守遺跡』行田市文化財調査報告書第12集 行田市教育委員会
- 斉藤国夫 1984 『原遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第16集 行田市教育委員会
- 塩野 博 1970 「埼玉県行田市長野神明遺跡について」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会
- 高橋亜貴子 1992 「東北地方縄文時代前期前葉組縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会
- 高橋俊男 1982 『袋・台遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書 吹上町教育委員会
- 瀧瀬芳之 1985 『愛宕通遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第51集
- 田部井功 1977 『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集 埼玉県教育委員会
- 塚田良道 1988 『瓦塚古墳 下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書第19集 行田市教育委員会
- 中島 宏 1984a 『池守・池上』埼玉県教育委員会
- 中島 宏 1984b 『行田市長野中学校校内遺跡採集の縄文土器』『資料館報』No.15 埼玉県立さきたま資料館
- 中島洋一 1988 『瓦塚古墳 下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書第19集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1990 『さきたま古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第23集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1991 『行田市市内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第24集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1993 『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』行田市文化財調査報告書第28集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1994 『馬場裏遺跡(18次)発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第29集 行田市教育委員会
- 西井幸雄 1989 『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
- 西井幸雄 1996 『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集
- 細田 勝 1999 『小沼耕地遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第247集
- 堀口万吉 1986 「埼玉県北部でみられる古代の噴砂について」『歴史地震』第2号 東京大学地震研究所
- 山本 靖 1998 『ハツ島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第219集
- 山本 靖 2000 『築道下遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第246集
- 吉田 稔 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 吉田 稔 1997 『築道下遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第188集

写真図版



馬場裏遺跡第23次調査区全景



調査区東縄文遺構群



調査区西平安～近世遺構群



第1号住居跡新期



第1号住居跡古期



第1号住居跡新旧床面



第1号住居跡旧カマド



第2号住居跡



第3号・第4号住居跡



第 4 号住居跡



第 5 号住居跡



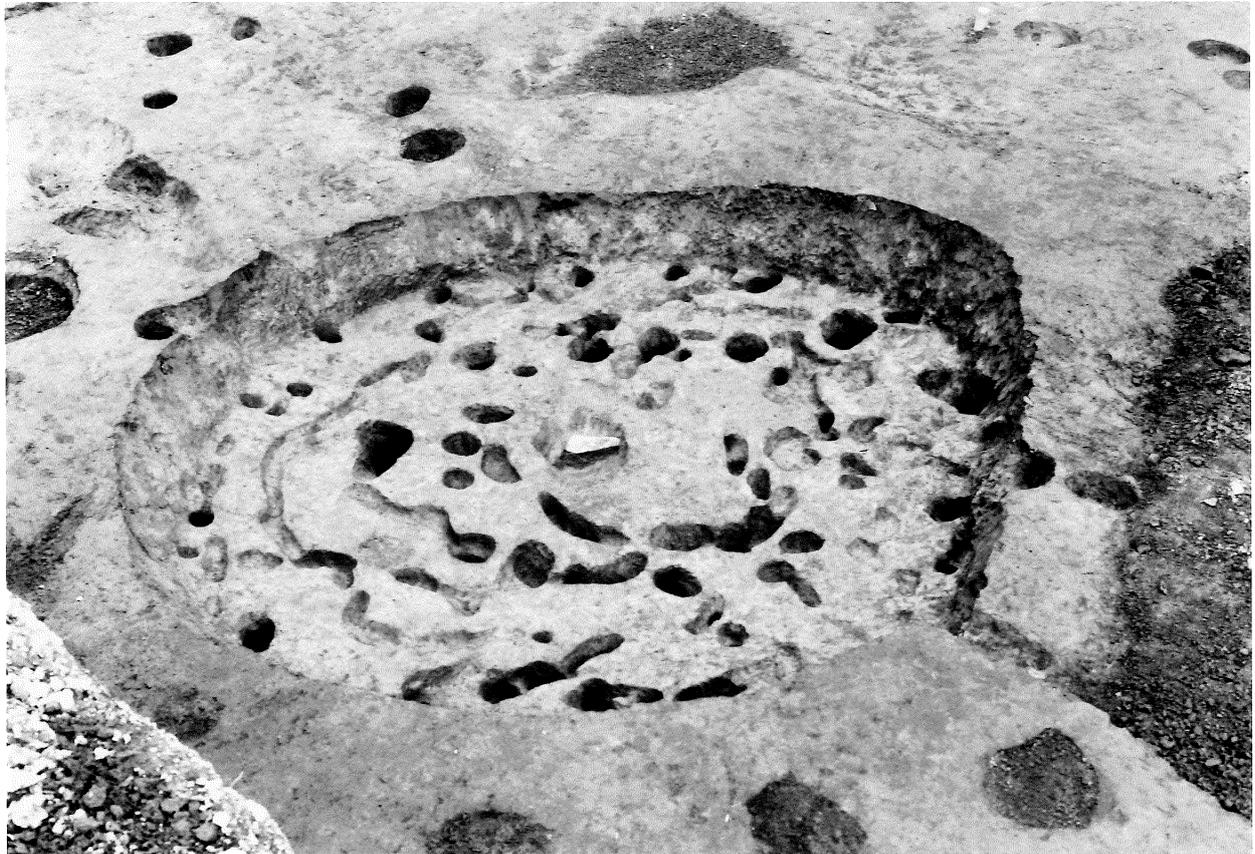
第5号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡



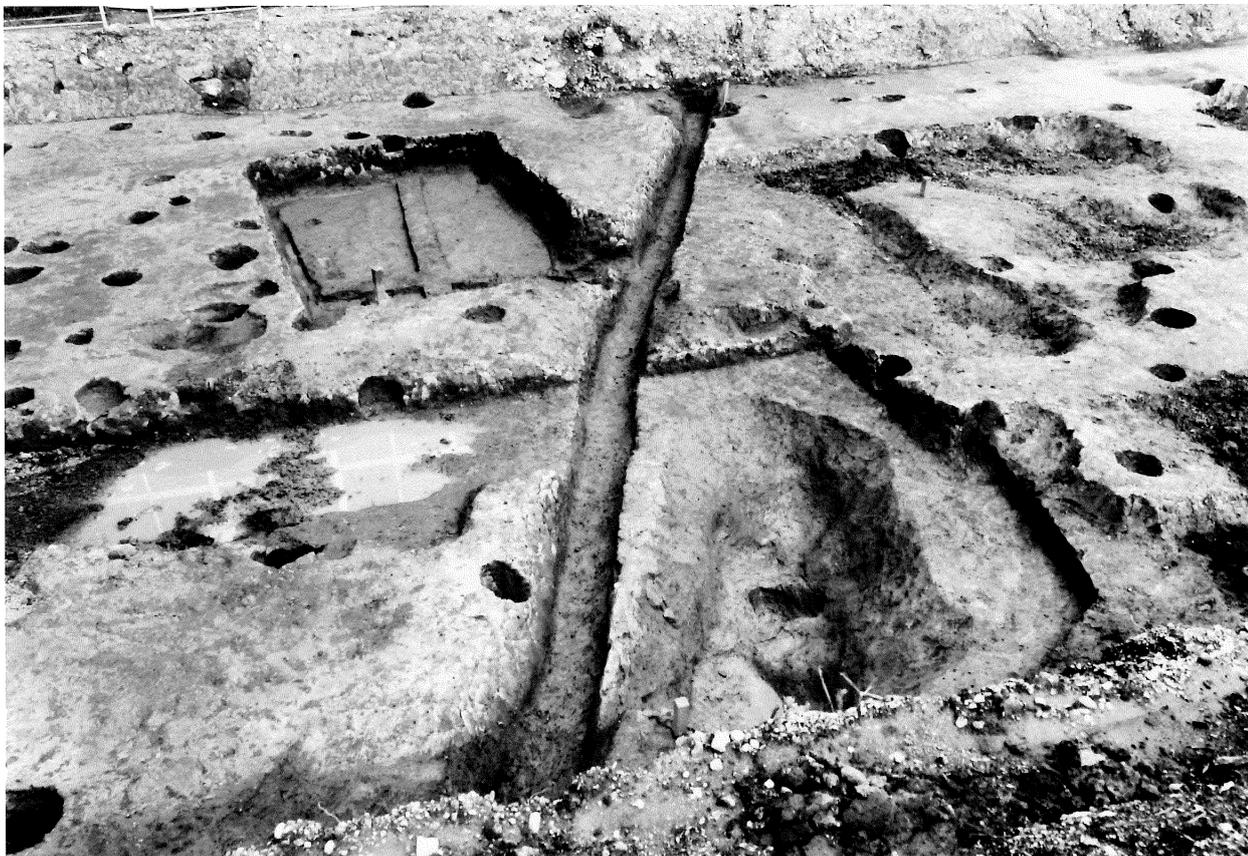
第 7 号住居跡



第 8 号住居跡



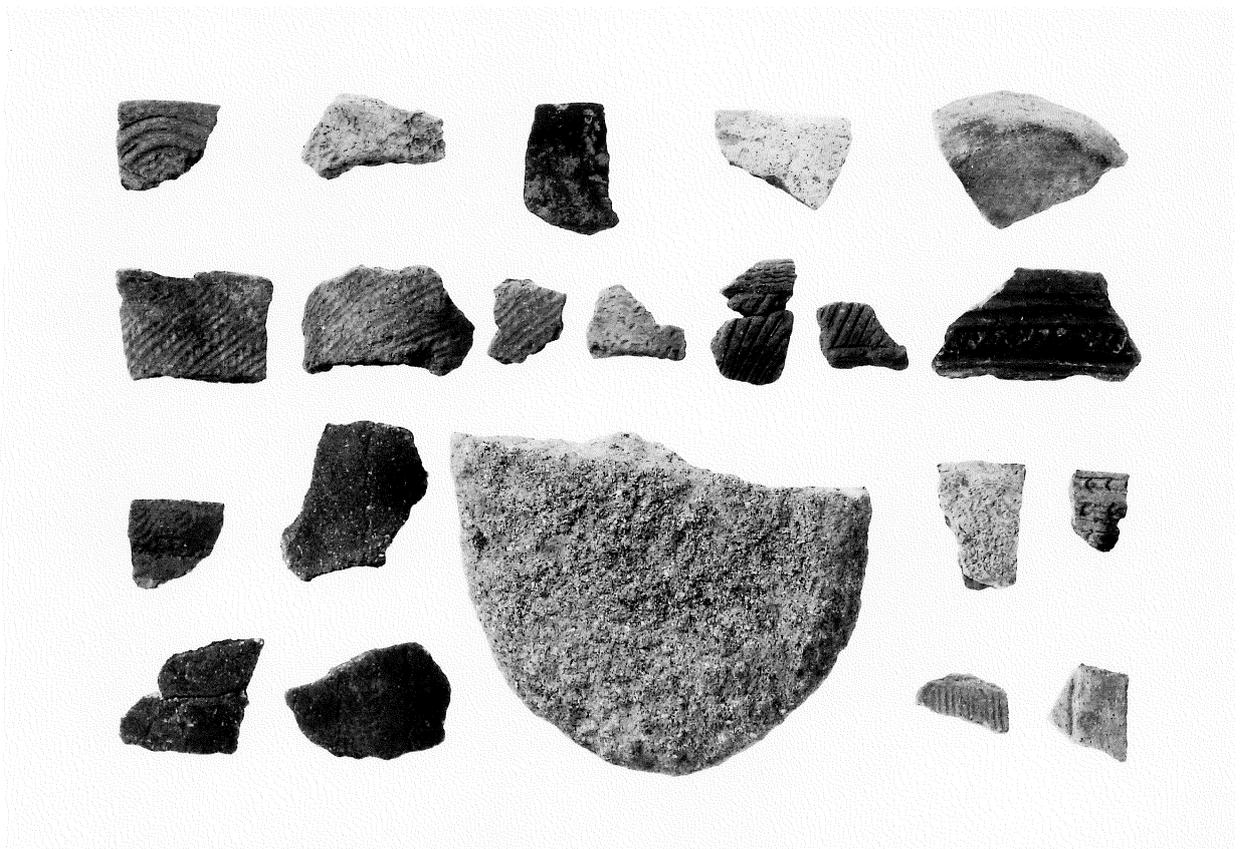
第1号井戸跡



第2号土壇・第1号溝



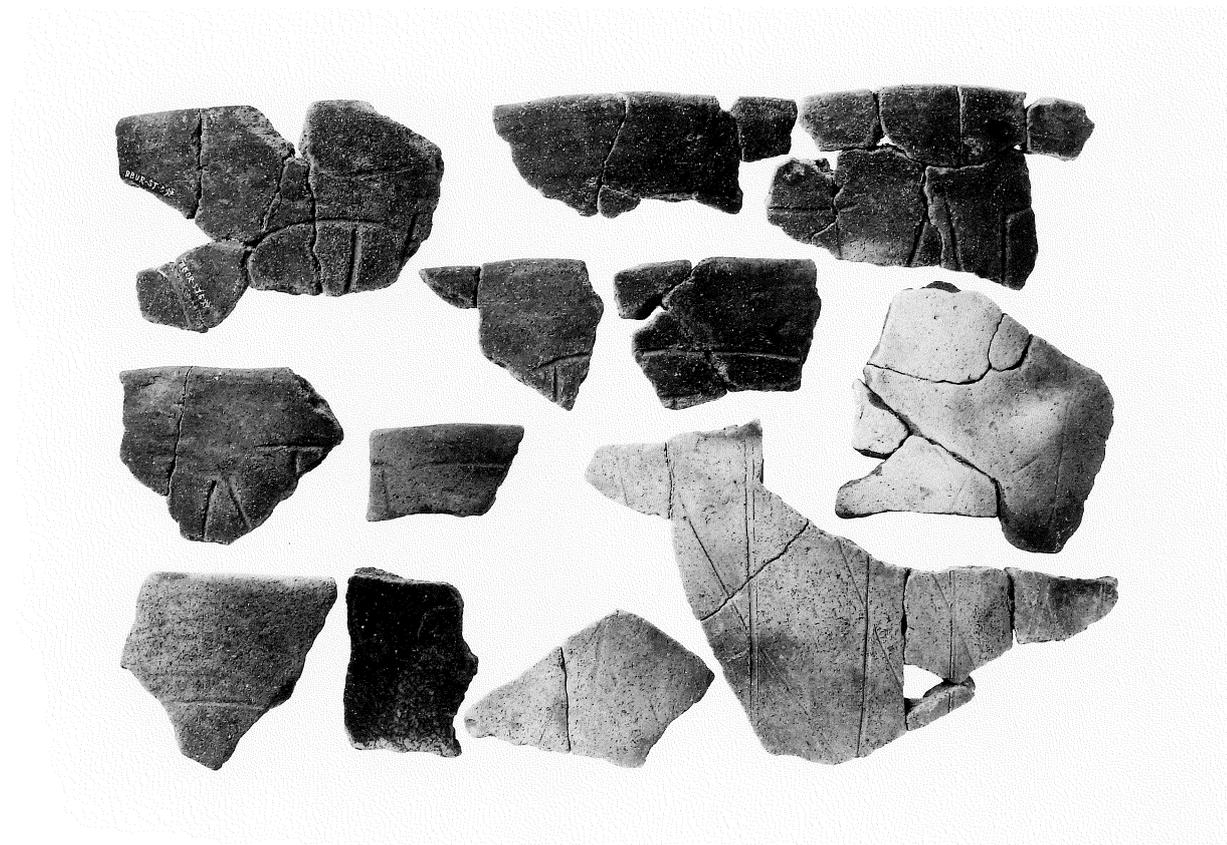
第1号·第2号住居跡出土土器・石器



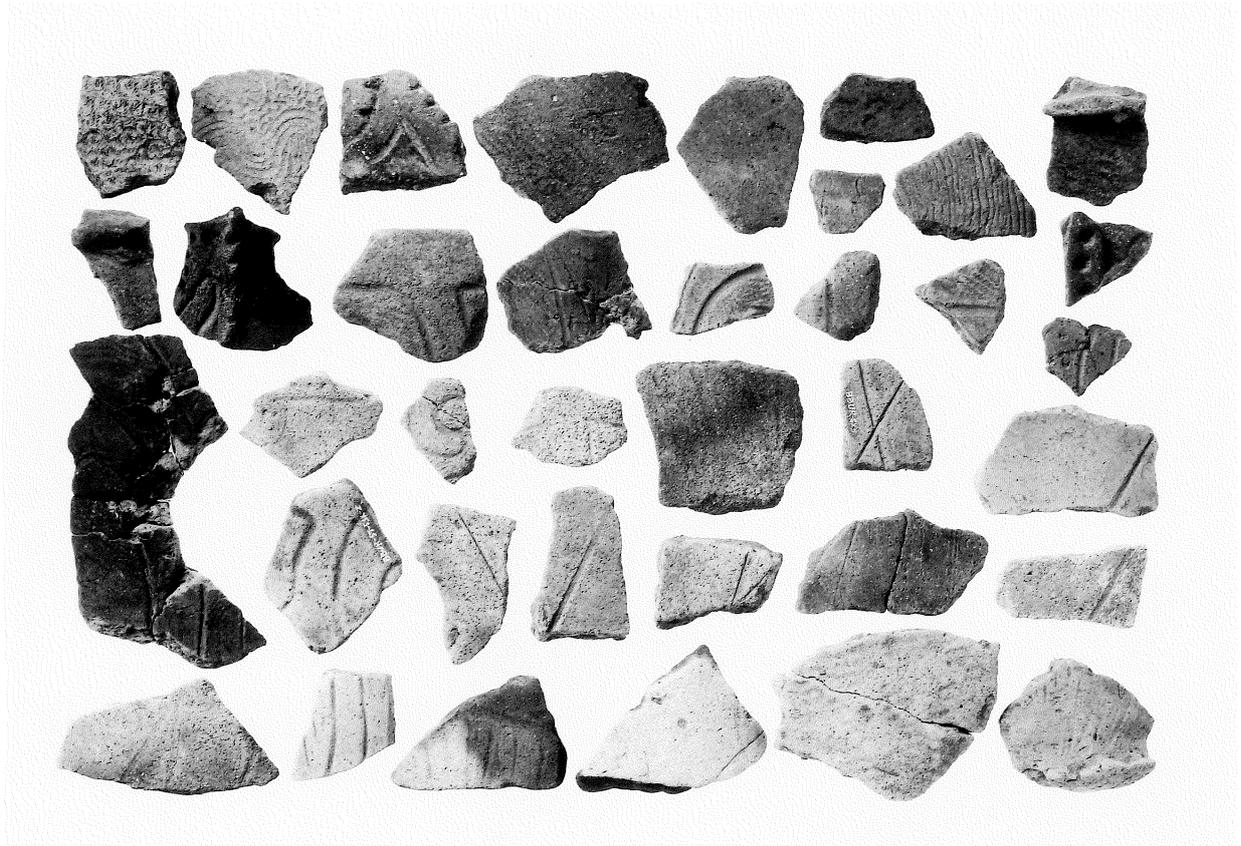
第4号·第6号·第7号住居跡出土土器・石器



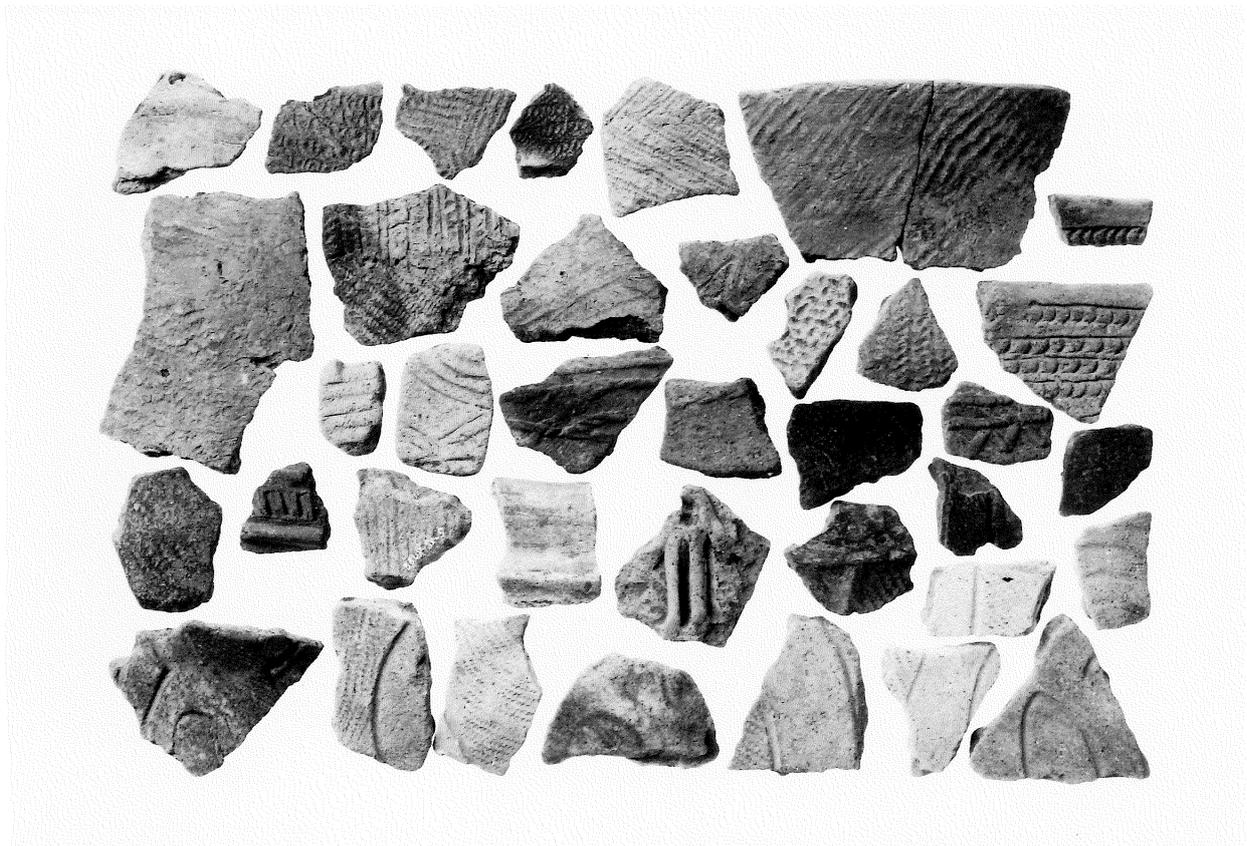
第5号住居跡出土土器（1）



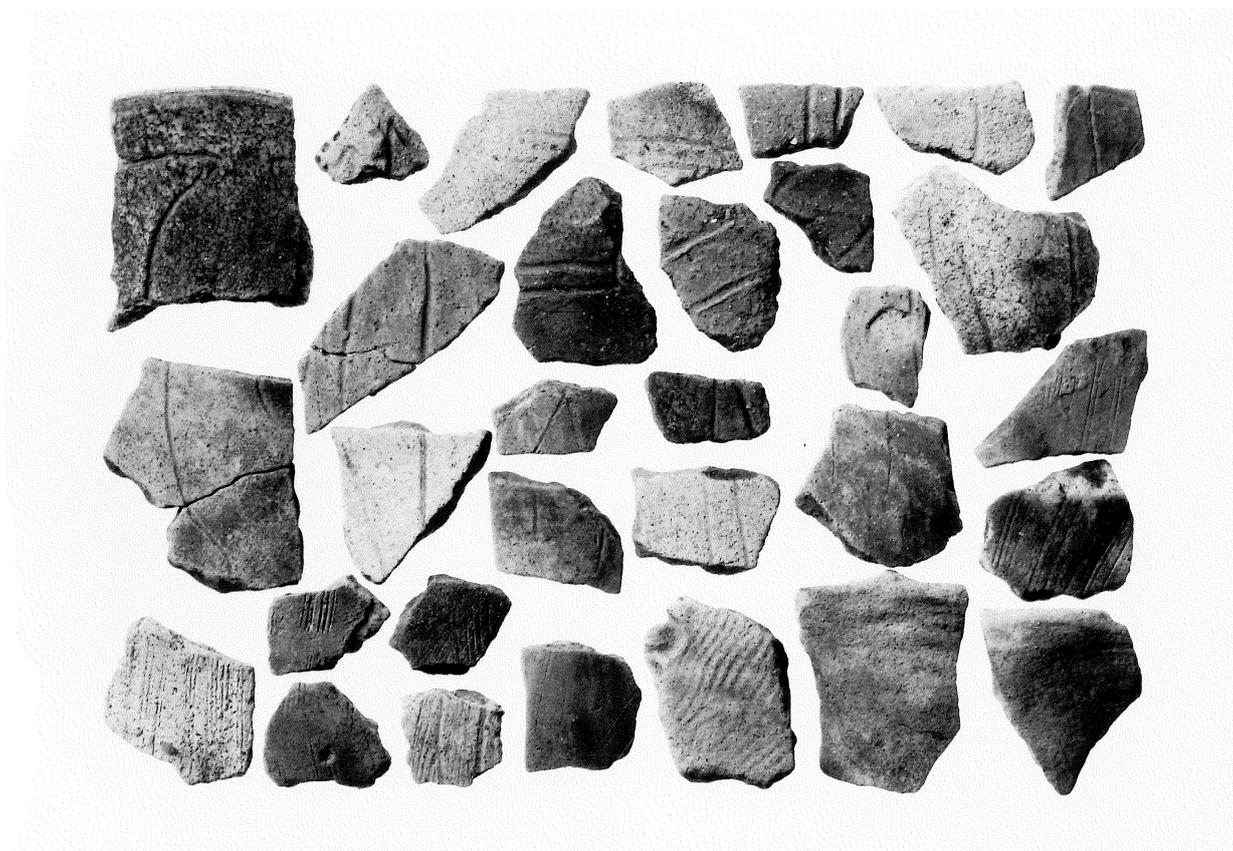
第5号住居跡出土土器（2）



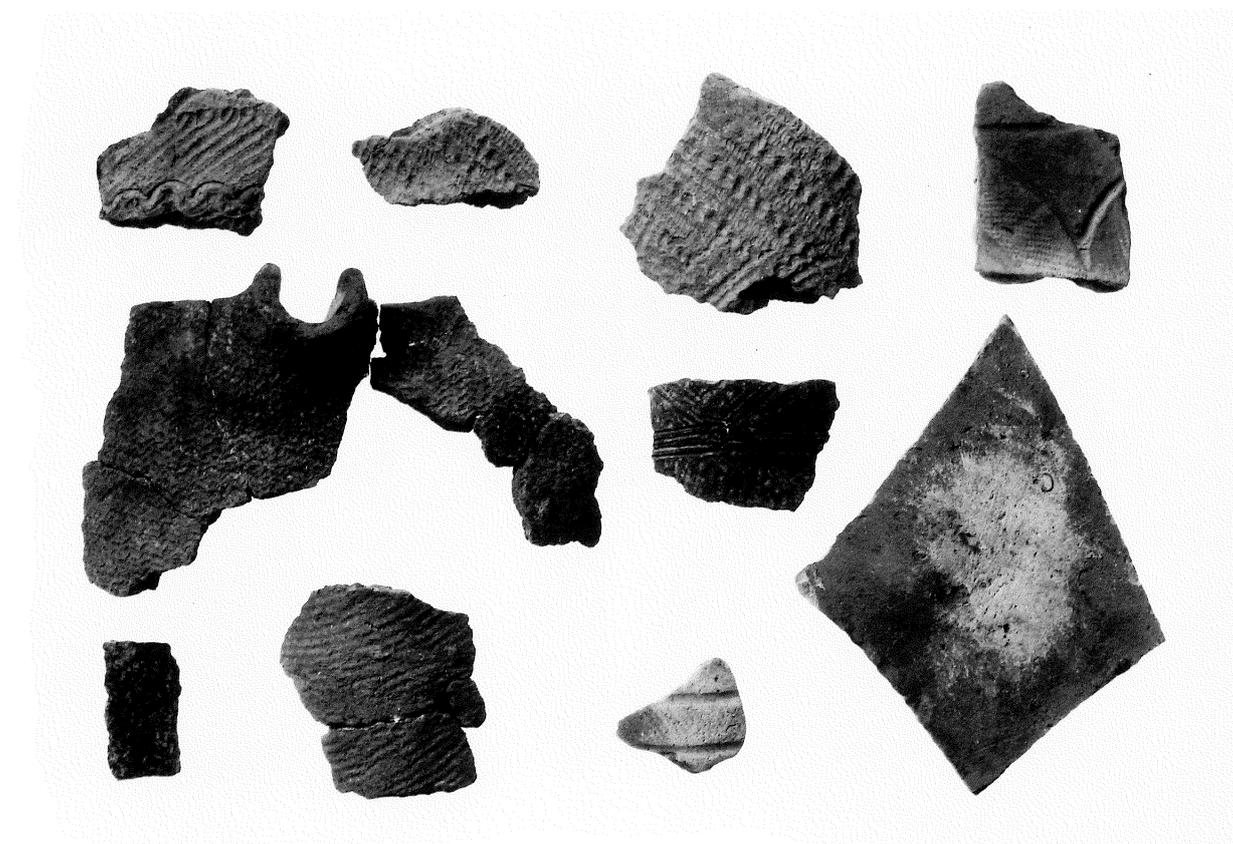
第5号住居跡出土土器（3）



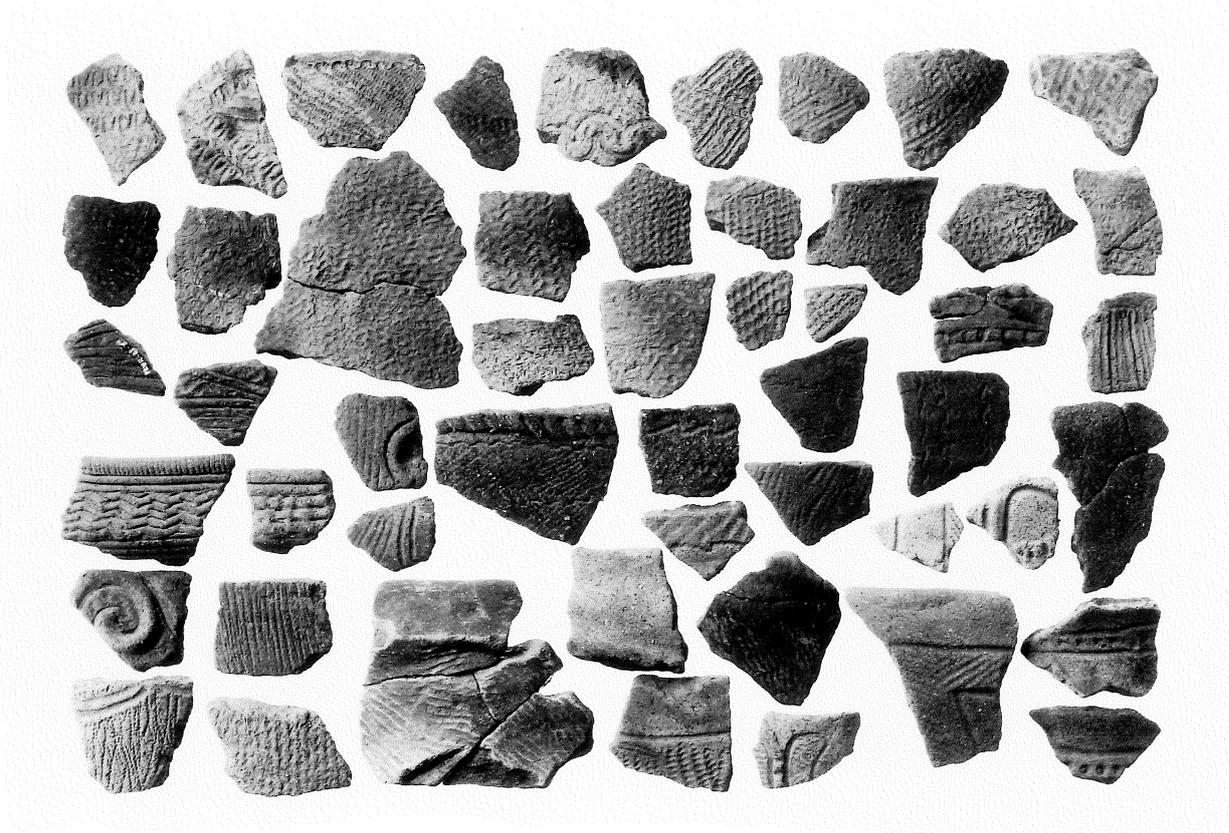
第8号住居跡出土土器（1）



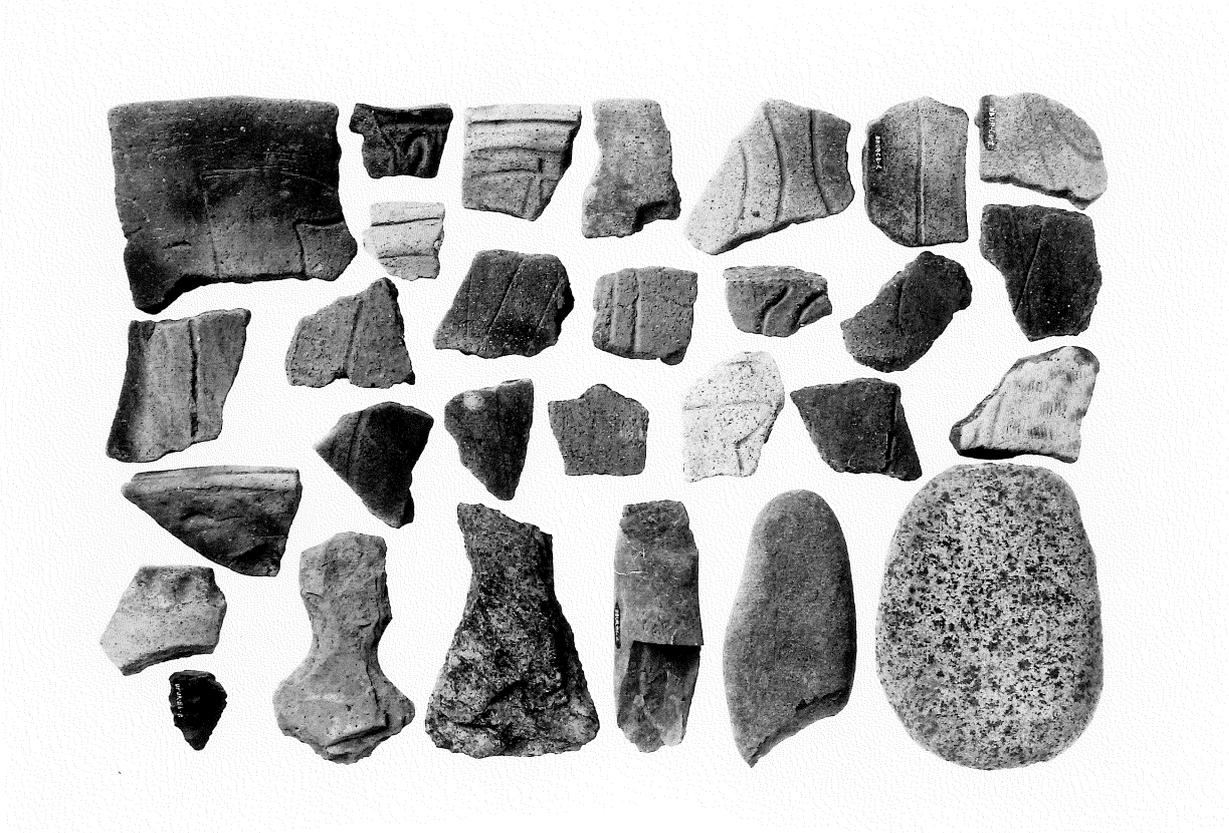
第8号住居跡出土土器（2）



土壙・ピット・井戸跡出土土器



遺構外出土土器（1）



遺構外出土土器（2）・石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ばばうらいせき							
書名	馬場裏遺跡Ⅱ							
副書名	県立行田進修館高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第270集							
著者氏名	黒坂禎二							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 2001 (平成13) 年 3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ばばうらいせき 馬場裏遺跡	さいたまけんぎょうだし 埼玉県行田市 ながの ばんちほか 長野1320番地他	11206	29	36° 8' 52"	139° 28' 11"	19980901 } 19981031	350	学校建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬場裏遺跡	集落跡	縄文時代前期 中期 後期 平安時代 中近世	竪穴住居跡 土壇 井戸跡 溝 ピット	8 6 1 1 多数	縄文土器 石器 土師器 須恵器 砥石 陶磁器			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第270集

行田市

馬場裏遺跡Ⅱ

県立行田進修館高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

平成13年3月20日 印刷

平成13年3月23日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

印刷／巧和工芸印刷株式会社